第４章　掛川市における送り神行事の特徴

はじめに

掛川市にはたくさんの送り神行事がある。送り神行事というのは、人に不安を与えたり危害を与える悪霊や病魔を集落の外へ送り出すという行事である。そして後を振り向かないで戻る、というのが一般的である。

このような送り神の行事は、個人的な行為ではなく集落全体を清めて安心を得るということで、年中行事の中に組み込まれている公の行事となっている。この大役をになって行うのは子どもたちで、それも基本的には男の子たちであった。

子どもたちは地域住民の期待を受けて行うのであるが、行う時間は夜中である。これは子どもたちに大きな覚悟を迫ることであるけれど、先輩たちと行ってきた経験を生かしながらすべて自主的に、互いに協力して成しとげていく。このため住民から感謝の気持ちとして米や麦、あるいは現金がお礼として与えられる。集落内のすべての災厄を払って笹竹を村境に送ってから、集まった礼金を集計して責任者である最上級生（親方、大将）の裁量で参加者に分け与えられると、眠い目をこすって参加した子どもたちは喜んで家に戻って眠りなおすのである。

今は夜中だけでなく夕方に行い、参加する子どもは女子が加わるところもあり、住民からのお礼は現金にと変わってきていることもあるけれど、子どもたちが中心となって自主的に行っていることは変わっていない。

このような行事が市内で23地区も行われているのに方法はほとんど同じである。ただ内容は大きく異なっている。そこで内容と実施時期を考慮して次の３つの形に分類してみた。

1. さなぶり（田植が終わる６月中旬）
2. 送り盆（お盆のとき）
3. 山の神（12月８日）

である。

現在は23地区で行っているけれど、途絶えてしまったものを含めると34地区にもなる。これらのすべてを調査したことから、各々の行事の内容がわかってきた。これらの実態を網羅的に述べてから、掛川市で行なわれている行事の特徴を述べ、静岡県内の他の地域で行なわれている送り神行事と比較して当市の行事の位置づけをしてみたい。

１　さなぶり

「さなぶり」は、遠州灘に沿った旧大須賀町大渕地区の雨垂、藤塚、野中、浜、岡原、中新井、新井、野賀の８地区と、旧大東町の三俣、浜野、報地、南大坂の４地区で行われている。ただ旧大東町の４地区は現在行われていない。

名称

すべての地区で「さなぶり」という。田植が終わるとお祝いのご馳走を食べて骨休めをすることをサナブリということから、その日の夜中に子どもたちが行う行事も「さなぶり」というようになった。

実施時期

この行事は、田植が終ったときに行なわれているから６月の終わりか７月初めに行われていた。今は機械化によって田植が早く終わるので６月の中頃の日曜日の夜中に行っている。日時の決定は、大渕地区全体の行事として行うために区長会で決める。

実施時間は、真夜中の午前０時から始めるところ、２時からのところ、３時からのところというように地区によって異なるが、いずれも夜中の２時間くらいをかけて、地域内の家を一軒ずつ笹竹で払いながら、漏れる家がないように道順を考えて回っていく。ただ大東町の４地区は昼に行っていたようである。

参加者の年齢

小学生が中心であるが、古くは14歳までということであったので（15歳から若者組・青年団に入るため）、小学生と尋常小学校高等科の生徒が参加していた。この伝統のために今も中学生が参加しているところがある（浜・野賀・岡原・野中）。

性別は本来男だけであった。しかし、子どもの数が減ってきたために平成13年から女子も参加するようになった（雨垂・新井）。

準備

準備はすべて前日の土曜日に行う。地域の公民館やお寺に集まって笹竹を近くの藪へ取

りに行く。大・中・小の笹竹をとり、年齢に応じて分配して各自でシデ（オシメなどともいう）を付ける。シデには２種類あり、鉦に付けるものと笹竹に付けるものと異なる（資料編３）。シデの数はたくさん付けるところと２～３枚のところと地域によって異なるが、中新井は奇数と決まっている。

太い竹も採って鉦を吊り下げて二人でかつぐ棒にしたり、御幣（シデの大きなもの）を差し込んだボンデン（梵天）を作るところもある（藤塚・三俣）。

鉦は区長のところからサンジー鉦という葬式のときに鳴らす鉦を借りてくる。かつては大きな双盤を用いていたところもあったが戦時中に供出してなくなったという（野賀・中新井・報地・南大坂）。

鉦は丁寧に磨いて光らせる。きれいにするというだけでなく悪霊を払う威力を増そうとするのであろう。このため田植の残り苗を用いたり、磨き砂をつけて普門寺草と呼ばれるハナカタバミを使って磨く。新井では、わざわざ海岸の淡水が湧き出ているところに行って磨き、神聖さを増すことにこだわっている。

鉦を叩く棒である撞木（しゅもく）は、今はあるものを使っているが以前は３週間も前に弁当をもって山へ行き、ウバメガシなどの硬い木の枝を採ってきて使った。中にはたくさん採って袋に入れて池の中に沈めておき、前日に引き上げて皮をむいて一番いい１本だけを使うというこだわりをもつところもあった（浜）。反対に鉦を傷つけないために柔らかい木のほうがいいと言って藤の蔓を採ってきたところもある（岡原、報地）。

出発点

夜中の暗い中で行う行事であるから、子どもたちが集まるのは登校する時に集合場所にするような馴染みのある公会堂や出荷場、お寺、お堂である。鉦叩きは早めにいって鉦を叩いて子どもたちを起こして呼び集め、地域の人たちに今から始めることを知らせる。

持ち物と役割分担

親方は最上級生が担当する。全体の総責任者として、引率、各家での応対、事後処理、さらに事故防止に気をつけながら暗い中で全員を統率する。以下年齢の高い順にボンデン、鉦担ぎ（鉦叩き）、集金（袋もち）、大笹、中笹、小笹、笹拾いと続く。笹持ちが各家の玄関先を払っていると家の人が起きてきてオヒネリ（お金のこと。お金を白紙に包んでひねって渡した名残の言葉）か、枡に入れた麦を渡してくれる。袋に入れてお礼を言って次の家に移る。笹竹やシデがちぎれて落ちると笹拾いが拾って袋か籠に入れて持ち帰る。中新井ではこの役を「貧乏神」、野賀では「ゴミ拾い」と呼んでいる。　また、各家を訪ねて行くとき、鉦は笹振りと一緒に玄関先まで入っていくが、屋敷の中に入らず外で叩いて待っているところもある。ボンデンを持ち運ぶ藤塚では、玄関先でボンデンを持ち上げて落す。ポンと大きな音を出してから「家内安全、五穀豊穣」と唱え、笹竹が玄関先を払ってお礼を頂く。

唱えごと

各地区の笹振りのときの唱えごとは次の通りである。

（雨垂）　おくりがみのかんじんや
　　かねにいっぱいおくんなさい
（藤塚）　ネンネコヤイト　ホーラヤイト
（野中）　ネンネコヤイトー　ホーラヤイト
　（以前）笹払いのとき
　　おーくりがーみのかーんじん
　　東大谷川へ納める時
　　エーラヤイト　ネンネコヤイト
（浜）　ネンネコヤイト　ホーホラヤイト
（岡原）　ネンネコヤイト　ホーラヤイト
（中新井）ネンネコヤイト　ササヤイト
　　オオブリヤイト　ササヤイト
（新井）　ホーラヤイト　ネンネコヤイト
（野賀）　チャンチャコヤイト　ホーラヤイト
（浜野）　ネンネコヤイト　ホーラヤイト
（三俣）　デンデコヤイト　ホーラヤイト
（報地）　デンデコヤイト　ホーライヤイト
（南大坂）ヤーラ　エーントー

これをみると２系統の表現があることがわかる。

１つは、「ネンネコヤイト　ホーホラヤイト」である。これには「チャンチャコヤイト」とか「デンデコヤイト」などと地域によって変化しているが基本は「ヤイト」にありそうである。南大坂の「ヤーラ　エーントー」もヤイトーが変化したものではなかろうか。

２つめは、雨垂と野中の「送り神の勧進や

鉦にいっぱいおくんなさい」である。のちに述べる山の神行事でも、他の地方でも唱えられている言葉で子どもたちの要求が直接的に表現されている。

これらの唱えごとから「さなぶり」をはじめ送り神行事の本質が見えてきそうである。このことについては特徴のところで考えてみたい。

勧進

勧進とは社寺や仏像の建立・修繕のために人々に勧めて金品を募集することである。ここでは子どもたちが悪霊などを夜中に払って地域内を清め、豊作を祈って歩く行為に、感謝をこめて各家々でお礼をする謝金といったらいいであろう。

お礼は昭和前期までは麦が多かった。二毛作の頃は麦を刈り取って収穫したあとで田植をしたから、サナブリの頃はどこの農家にも麦があった。そこで「送り神の勧進や　鉦にいっぱいおくんなさい」と子どもたちからあからさまに言われれば一升枡、あるいは鉦叩きの鉦に一杯いれて渡したものである（資料編24）。勧進は子どもたちの要求の賜物でもあった。集まった麦は親方が近くの店に売りに行って現金にしてみんなに分けた。

笹を納める所

すべての家々を払って出発地へ戻ると笹竹を集める。そのとき払い終わった笹竹にお酒を吹きかけて清めをしているところがある。笹竹の上に鉦を乗せて２合くらいの酒を、年長者から順に吹きかけてから笹拾いが東大谷川（柳瀬）へ納めに行った（雨垂）。疫病とか悪霊を笹竹で追い払っただけではなく、その手段に用いた笹竹に酒を吹きかけて清めるほど徹底していたのである。

笹竹は地域の村境に納めるか、海や川に流す。疫病や厄病などを地域内から追い出して、戻ってこないようにしたのである。墓地の竹藪に納めるのは供養のためだという（中新井）。

お金の配分

各家でいただいたお金は年齢に応じて分ける。笹振りが終ってもまだ暗いときは、一度解散して寝直してから再び公会堂などに集まって親方の裁量で分けることになる。以前は学校に行かなくてはならなかったから下校後に集まって分けた。

まず同年齢は同じ金額で小さい子から分けていき、残った分は親方（最上級生）のものとする。年により集まる額が異なるから、親方の努力の違いによるといわれることになる。そこで起きてくれない家ではオヒネリをくれるまで粘るとか、一通り回ってきてから再度訪ねるなど、親方の努力が見られる。子どもたちの最も楽しみにしている現金収入であるから、少しでも多くなることが情熱の源である一面を示している。地区でも最近は500円程度は出してやるように回覧をまわしてあるので、大方の家は子どもたちに協力している。

さらに地区の中で０歳児から幼稚園までの男の子がある家にはお菓子やお金を届けている（藤塚・野賀・中新井）。資料編３に「幼稚園以下の男の子全員にやること」とある。将来、仲間となって一緒に行事をすることを祈って行うのであるが、男の子に限定しているのは伝統的な意識として、地元に残って地域を支えてくれることを願ってのことであろう。

行事の意義

さなぶりは、田植が無事終了したことを感謝し、田の神を送る、田植終いの稲作儀礼のことであるが（『日本民俗大辞典』）、その晩に子どもたちが家々を払って歩くことから地元の方は次のように述べている。「田の神を送る祭りを言う。現在では神送りの神事は忘れられ、田植終了を祝って村をあげて骨休みをする時と理解されている。さなぶりで送る田の神は豊作をもたらす神ではなく害をもたらす負の田の神だとも言はれている。」（平成13年大須賀町の調査報告原票）。まさに田植が終った晩に日照りや水、風、虫など害をもたらす田の神を送るという見方もあることを示している。

２　送り盆（ショーリョー送り）

お盆は、先祖の霊や１年以内に亡くなった人の新仏を迎えてまつる行事である。盆月に入ると墓地の掃除をし、寺施餓鬼といって旦那寺で供養をし、その前後に内施餓鬼といって各家の供養をする。このどちらかで色紙の施餓鬼旗（せがきばた）をいただく。時期は、市の中心部が７月盆で周辺部が月遅れの８月盆で行っている（資料編25）。

盆の13日になると迎え松明(たい)を焚き、先祖の霊を盆棚に迎えて家族で供養し、亡き人とともに14日、15日と過ごす。そして16日の早朝（あるいは15日の夜）に盆棚に供えたものをすべて川へ流して送る。これを「精霊送り(ショーリョー送り）」とか「オショウロさんを送る」という。これでお盆の行事は終わり日常の生活に戻るのである。

ところが16日に精霊さんを送ったのに再び送り盆とか、お精霊送り、あるいは施餓鬼旗送りといって先祖さんを送る行事を行なっているところがある。子どもたちが笹竹を持って、各家の玄関先や軒下の「オショウロさん」を鉦や太鼓のリズムに合わせて払い清めてオヒネリをもらい、各家の施餓鬼旗や初盆の家の盆灯籠を集めて村境に送るのである。先の「さなぶり」と同じであるが、大きく異なる点は笹竹に付けるものがシデではなくて施餓鬼旗であることである。神道的なシデに対して仏教的な施餓鬼旗となっている点で盆の行事らしくなっている。しかしシデでも施餓鬼旗でもともに聖なる呪物であるから、払いの威力は大きいのである。

この行事の名称や実施日は地区によって異なる。そこで、次の４つに分類して実施地区を示し、それぞれの特徴を述べることにする。これは名称や形態の類似するものを単純にグループ化したものである。

(1) ヨイトコ系

西部＝平野・篠場・正道、東北部＝水垂上

(2) チャンチャカチャン系

西端部＝領家・岡津・高御所・原川・徳泉

(3) ススハライ系

東部＝寺ヶ谷・影森・海老名・宮村

(4) ショーリョー送り系

北部＝柚葉・東山

名称

(1) ヨイトコ系は市街地の外周にある農村部で行なわれている。西部の平野では「ヨイトコ」といい、その隣の篠場では「ヨイトコモイト」、正道と水垂区上組では「ヨイトコサッサァ」という。３か所ともヨイトコが共通した名称となっている。唱えごとから名付けられたものであろう。

(2) のチャンチャカチャン系は、掛川市の西端を流れる原野谷川と垂木川流域に集中している。領家、岡津、高御所は「チャンチャカチャン」、原川は「ジャンジャコジャコジャン」、その南の徳泉は「ジャンジャカジャカジャン」という。これらは笹払いのときに子どもたちが打ち鳴らす鉦の音から名付けられたものであろう。

(3) のススハライ系は、東部の旧東海道沿いに集中している。寺ヶ谷、影森は「ススハライ」（戦前は「精霊送り」ともいった）という。笹竹で軒先を払う様子が年末の大掃除に行っていた煤払いに似ていることから名付けられたのであろう。海老名は「オトーロー（お灯籠）」という。これは初盆の家の灯籠を集めて送るからであろう。宮村は「ボンボン」といったが、この由来はわからない。オトーローと同じく盆灯籠を集めることから名付けられたのだろうか。

名称は異なるけれどいずれも軒先を払う前に「すす払いに来ました」と言って笹竹で軒を払うのでススハライ系としておく。

(4) のショーリョー送り系は、北部の山間部の柚葉と東山での名称である。東山は「トーロン送り」ともいったというから (3) の海老名と共通する内容を含んでいるのだろう。さらに (1) の篠場や平野、(3) の寺ヶ谷でも戦前はショーリョー送りともいったというから、精霊送りはヨイトコ系やススハライ系と目的や内容に類似することがあるといえる。

実施時期

主に24日に行われる。この日は当地方ではウラ盆といわれている日である。この日に行うのは13日から16日までの盆だけでなく最後の盆と考えたからであろう。当地方では「俗にうら盆といふことあり。盆を本盆とし、二十四日をうら盆といふ。これは盂蘭盆の意を誤解せるに由るか」と『磐田郡誌』にあるとおり、本来の盂蘭盆、すなわち本盆に対して付録のというか最後の盆ととらえているのである。これはウラン（私らの）盆であるから公式な盆ではなく私的な個人的な盆であるという意識もあったようであるし、この日は地蔵盆でお地蔵さんの縁日になっているから、地獄で苦しむ故人を救ってくれるという地蔵信仰の影響もあろう。いずれにしてもこの日限りにしてご先祖様との交流はしばらく断ち切ろうというけじめの日であった。

盆行事が７月盆と８月盆と２通りあるように、この行事も同じ24日でも７月に行うところと８月に行うところとある。７月盆のところは市街地に近い高御所、寺ヶ谷、影森、海老名、宮村であるから７月24日に行い、月遅れの８月24日に行うのは西部の平野、篠原、領家、岡津、原川、徳泉などである。

実施する時間は、夜中とか夜明けの暗い中で行うが、(1) の水垂区上組、(2) の高御所、(3) の寺ヶ谷、海老名、宮村などは７月24日の午後に行っている。これは農繁休暇が多かったためにまだ夏休みになっていなかった頃、学校から帰ってから行わざるをえなかったことが影響しているものと思われる。午前中に行うのは (3) の影森だけである。

日時が他と異なるのは（1）の水垂区上組・正道と（4）の柚葉、あるいは北部の山中、孕石、丹野、榑子で、17日の午後に行なっている。これは北遠から森町などと同じである。

参加者

参加者の年齢は、ほとんどが小学生であり、それも男子のみであった。しかし今も男子だけで行なっているのは領家区３区のみで、他は女子も参加するようになり、幼児や中学生が入っているところもある。「さなぶり」を行う地区と同じ傾向になっている。

これらの笹振り行事は子どもの行事になっているけれど、(4) の柚葉は子どもから大人まで全員で夕方に行っていて、ショーリョー送り中心の地域全体の行事となっている。これは精霊送りに共通することで (1) の篠場や平野、(2) の岡津なども夜中に行う子どもによる笹振りと、夕方になって村中の人が行う精霊送りと二重構造になっている。(4) の東山は各家々で送りをしているが本来は村全体の行事であったと思われる。

準備

笹竹と鉦、鉦を吊るしてかつぐ太い竹などは前日までに用意する。鉦は小型の葬式鉦を用いるが、徳泉は大型の双盤を用いていたという。太鼓が加わる市の西のほうでは車に太鼓を乗せる屋台を作る（56、63、98ページ参照）。これは袋井市や森町のカサンボコ（傘鉾）の盆車の影響であろう。さらに笛太鼓のお囃子が奏でられるのは掛川祭りと同じで、平らな道は「屋台下」、坂道は「大間」の曲であるし、この車を「屋台」と称しているから町の祭礼の影響もみられる。まさに施餓鬼旗や初盆灯籠を乗せた精霊送りの行列は農村のお祭りの様相をなしていた。

また、(2) のチャンチャカチャン系のところでは真鍮の鉦を砂や粘土、(3) のススハライ系のところではスクサ（かたばみ）の草などでよく磨いてピカピカにする。これはさなぶりでも、カサンボコをする子供連でも同様である。ここに文化の共通性がみられる。

役割

全体の指揮をとる最上級生が親方（あるいは大将）、お礼のお金を受け取って袋に入れてもつ役が乞食（コンジキ。またオヒネリもらいとか、お金集め、集金係ともいう。以前は麦や米など現物が多かったから大きな布の袋や籠をもって歩いた）、鉦叩き（あるいは太鼓叩き）、その他を笹振りといい、(3) の寺ヶ谷・影森・宮村などはススハライという。

笹振りの方法

夜中に行うところでも夕方行うところでも同じで、鉦叩きがお寺や公会堂などに早く来て鉦を叩いて仲間を呼び集める。全員集まると親方の指揮に従って鉦を先頭にして出発する。変わっているところは高御所区新田で、午後になると正法寺へ笹竹を持って挨拶に行き、和尚さんの手で笹竹に施餓鬼旗を付けてもらい、鉦を借りてお寺の井戸のまわりを７周半回ってから出発している。他とは異なる丁寧なしきたりを守っている。

笹振りの一行は鉦をチャンチャカチャンと鳴らしながら進む。太鼓もある領家区２区と領家区３区、原川では太鼓がドンドコドンと呼応する。そのうしろを笹振りが続く。このとき岡津では鉦に合わせてチャンチャカチャンと声を出したが他の地区は無言で歩いていく。

各家の屋敷に入って「笹振りにきました」とか、「ススハライに来ました」と言い、玄関先で軒先を払いはじめると家の人が出てきて笹竹に施餓鬼旗を付け、お礼のお金を渡してくれる。それを乞食役が受け取る。初盆の家からは盆灯籠（今は盆提灯）を預かり太い笹竹に吊るすか、竹の棒に通して２人でかついでいく。初盆の家のお礼は他の家より多い。

(4) のショーリョー送り系は以上のものと

異なるので後述する。

唱えごと

笹竹を振るときに唱えごとを言うところと言わないところとある。平野は「ヨイトコヨイト」といい、篠場は「ヨーイトコモイト（古くはヨーイトコヨイトだった）」と唱え、水垂区上組は「ヨイトコサッサ　トコサッサ」と唱えたが、他の地区は無言で笹竹を振るだけである。その代わりか鉦（太鼓）が鳴りつづけている。このため名称が唱え言葉でなく鉦の音からついているのだろう。ただ鉦（太鼓）が屋敷の中に入っていくところと、入らないで道やカイド（屋敷の入り口）で叩いているところとある。

叩き方は地区により少し異なる。たとえば、領家ではチャンチャカチャカチャン　トントコトコトン（タンタタタタタン）であるが、岡津では東組が太鼓を用いてドンドドン、西組が鉦を使ってカンカカンと叩き、鉦や太鼓にあわせてチャンチャカチャンと口で唱える。

施餓鬼旗などの処理

集めた施餓鬼旗や盆灯籠、あるいは初盆の家で太い女竹４本で作った施餓鬼棚などは、橋の上や河原、村境、地蔵堂（寺ヶ谷）で焼いてから川へ流すか穴の中へ納められる。高御所は和光橋、領家区１区綱川は善光寺橋（古くは山の墓地だったという）、領家区２区は高橋、領家区３区は旧長昌寺薬師堂（今は２区と一緒に墓場で焼く）、岡津は夜中に集めた笹竹を仲道寺の石段に置いておき、夕方の送りのとき善光寺橋から納める。徳泉は梅橋、原川は戦前には払いはなく集めた灯籠と鉦担ぎ棒を三池橋の上から流し、それから「鉦を洗ったで銭くりょう」と言って各家をまわり集金した。

どこでも笹竹は納めるまでは地面につけてはいけないという禁忌を守っている。ケガレが戻ってくることに注意しているのである。その気持ちが、払い忘れた家から「私の家も払って」と呼びにくることがあるほどこの行事は期待されていたし、振り返ると厄とか霊が付いてくると怖れられたのである。

お礼金の配分

どこでも最上級生が年齢別に差をつけ、任務に応じて分けている。下級生はわずかな額だとわかってはいても他人からお金をもらうことができる唯一の機会であるから、手にするまでワクワクして待っている。そして上級生の分け前が多いのを知って早く大きくなって親方になりたいと願ったという。子供会の役員の指導で均等に配分しているのは（1）の正道（2）の高御所と領家区２区（3）の寺ヶ谷だけである。平等化が進んでいる現在でも大人も下級生も上級生の任務と責任感を評価していて、子どもたちの意思で差をつけていることを認めている。

変わっているのは正道や寺ヶ谷で、上級生の家で白いご飯と味噌汁の夕食をよばれ、そのあとでお金を分配した。直会（なおらい）をして和をはかろうとしたのであるが、その逆の場合もあった。（2）の原川では行事が終ってから５年生が下級生に礼金を分配したあと、６年生の分を家まで届けていたという。６年生は権限を５年生に譲っても権益だけは得ていたといえよう。

面白いのは岡津で、分配の額が決まると少し余らせた硬貨を公会堂の中の机や座布団、棚の隅などに隠して下級生を呼んで探させて楽しみの時間を作っている。その余興が終ってから改めて整列させて分配金を渡す。平野・篠場では送り盆のために屋台を作るから、提灯やロウソクの購入費や車の借り賃を差し引いてから親方が分配する。もはや大人社会の実践を行っているといえる。

もらったお金はどのように使うかは自由である。その日のうちに菓子を買ったり望みの物を買ったり、貯金をしたりしているが、水垂区上組では「もらったお金はその日に使ってしまえ」といい、掛川の町まで走って行って文具や駄菓子を買ったものだという。

送り盆の方法

子どもたちが集めてきた施餓鬼旗を、焼いたり流したりして終わるところが多いなかで、夕方になって地域の大人も子どもも一緒になって村境に送っていくところがある。送り盆のことであるが、「精霊送り」とか、単に「送り」ともいう。

（1）の平野と篠場では、24日の夜明けに笹振りをしてきた上級生は、保護者とともに午後から屋台作りをする。屋台は荷車かリヤカーに施餓鬼旗がついた笹竹を束ねて立て、中心近くに椎の木を立てて赤い丸提灯を５個吊

るす。古くは松の木だったというから掛川祭りの屋台やカサンボコの盆車と共通するもので、神や精霊の依り代となる。これは京都の祇園祭の山鉾とも結びつく形態で祇園信仰の影響もあるかもしれない。車の前に小太鼓、後に大太鼓をつけ、引き綱を付ける。それから笹竹や盆灯籠を焼く場所の穴掘りをする。

以前は３班に分かれて、１班はロウソクや提灯を買いに３キロほど離れた掛川駅のほうへ行き、２班は荷車を借りてきて屋台を作り、３班は穴掘りに行くというように、子どもたちが手分けをして行なっていた。

日が沈む頃、施餓鬼旗を乗せた屋台は初盆灯籠を先頭に、地域の人たち全員で送っていく。このとき太鼓は掛川祭りの祭囃子の曲で行進する。祭り用の摺り鉦を叩き、笛を吹く人が参加するからまさにお祭りの行列である。

平野では西の八幡橋に行き橋の上で欄干の外へ盆灯籠や笹竹を突き出して燃やし、熱くて持てなくなると川へ落とす。篠場は東の山で穴を掘って燃やす。そのとき参加者は手を合わせて精霊を送る。最後に初盆の家族代表がお礼を述べ、「故人の供養のために召し上ってください」と言ってお菓子を振る舞う。帰りは魔が付くから振り向くなといい、送りの場への往復は道筋を変えるというように、葬式のときと同じ禁忌が見られる。

上級生は地区の役員と片づけをして終わる。

(2) の岡津も屋台を作って夕方の送りをするが、他の地区では子どもだけで笹振りをしてから村境か川に送って終わる。そんな中で宗教的な行為を行うのは (2) の岡津で、「ヨイトコサッサア」と唱え、念仏を唱えてお精霊さまを送る。領家区３区では正法寺の住職が舎利礼文（しゃりらいもん）を読経している時に送っていった。

このように送り盆行事には、子どもたちによって各家を払う笹振り行事を行うだけのところと、それをしてから地域全体で地域のお精霊さんを送っていくところとがあることがわかる。とくに後者の場合は、自分の家だけでなく地域の先祖の霊を敬虔な気持ちで見送っている。亡き人たちと強い絆でつながれていることを示している。ここに精霊送り（送り盆）の本質があるといえよう。長野県の南端の新野の盆踊りのあとで17日の朝に送りをすることや、浜松市天竜区水窪町の送り盆、さらに南下して春野町、磐田市豊岡地区、森町などと共通する行事である。

柚葉と東山の精霊送り

これと共通するのが (4) の精霊送り系（送り神ともいう）である。原野谷川の上流の柚葉は標高400mほどの山の上の小さな集落である。

昭和の時代には７戸、今はすべて離村して住む人はいない。ここでは８月17日の午後３時頃に大人と子どもが集まってみんなで送り神堂へ精霊を送っていく。行列は２人でかつぐ60cmほどの双盤、その後ろを首に50cmほどの締め太鼓を掛けた太鼓が続き、その後へ笹竹をもつ人たちがついていく。「送り神送れよー」と先頭がいうとそれに唱和しながら15分くらい坂道を登って見晴らしのよい送り堂に行く。持ってきた笹竹（ヘイソクという）を道の端に挿してからみんな揃って「オーイ」と谷底に向かって叫ぶ。同時に鉦と太鼓が叩かれると今度は全員で手を叩いて送る。これを何度も繰り返してから「お大事によー」、「またおいでよー」と叫ぶ。いろいろな言葉が飛び交って精霊と別れを告げて精霊送りを終わる。磐田市豊岡地区万瀬でも同様である（資料編12）。

昭和40年ころの虫送り　森町亀久保
（『森町　むかしといま』より転載）

これを「送り神」ともいうのには理由がある。盆になると先端を切った男竹に松明を付けて３日間火を灯した。その竹を17日の午前中に松明を差し込んでいた竹の先端部分に「ソーリョーさんのお弁当」といって米粒を10粒ほど入れてから切込みをいれて白紙で作ったヘイソク（幣束）を付ける。この竹で「ソーリョーさんが残っていちゃーおえんから」と言って家の中の全ての部屋、勝手場、土間、

さらに家族一人ひとりを丁寧に祓って清める。

この竹を「ヘイソク」というのは清浄な幣束に神が依り付いているからで、この聖なる竹で精霊を払って弁当を持たせて送るという構造になっている。ここでは施餓鬼旗は畑に挿して虫除けに用いているから、仏式の施餓鬼旗送りではない。神式の幣束（御幣）で精霊と悪霊を払うのであるから「施餓鬼旗送り」ではなく「送り神」というのであろう。

もちろんここではお礼に何かもらうということはなく家々の先祖を共同で送るという地域全体の行事であった。

さらに柚葉では暗くなってから「ヒャクハッタイ」（百八タイ）を行う。７戸の家でタイマツを持ちよって108本をお墓の前で焚いて送り火で完全にソーリョーを送る。同様なことは近くの田代や山中、森町亀久保でも行っていたが、亀久保では「虫送り」、嵯塚では「盆送り」と言っていた。

東山では７月の16日に精霊送りをする。「トーロン送り」ともいい、各家ごとに施餓鬼旗をつけた笹竹や盆灯籠を島田市の大代との境の首切り沢へ送った。地名が怖くて笹竹を挿すと走って帰ってきたという。ここは家ごとで行っている点で他と異なる。

掛川市北部の山間部で行われている精霊送りは、さらに北の浜松市天竜区の水窪町や春野町と共通し、市内の西部の篠場や平野も同じ形態がみられるから北遠から中遠に及ぶ盆行事であるといえよう。この送り盆と子どもの笹振りとは別の系統の行事であったが、笹振りを中心にするところと、送り神を中心とするところ、その両方を行うところができてきたのである。

３　山の神

川久保の山の神

12月８日近くの日曜日、午後1時から４時頃まで山の神の行事を行なっている。戦前は12月８日の午後と決まっていたから学校が終わってから行なった名残で今も昼に行う。参加者は歩けるようになった幼児から高等科１年までの男子であったが、平成23年は小学生が１人しかいないために人集めをした結果、幼児から高校生、さらに地区を離れた親戚の人も参加して30人ほどの人数となった。

準備は区長さんが山の神の祠を新藁で作り、笹竹に付けるシデを用意する。保護者は２ｍ余の大笹と１ｍ余の小笹を人数分採ってきて１本あたり２枚のシデを付ける。鉦は太竹に吊るして二人で担ぎ後ろの人が叩く。この真鍮の鉦をかつてはカタバミで磨いて光らせた。年長者が鉦叩きと「お供え貰い」をし、他は笹振りとなる。

集会所から出発。鉦は先頭を歩いて道案内をするが屋敷の中には入らないで道で叩いている。笹振りは「ヤアマアノ　カアミノ　カアアンジ」を４～５回唱え、お米を枡で受け取るときヒトーツ、フターツと数えていたという。また藁葺きの屋根の頃は、しっかり払うと屋根の藁が落ちてくるので丁寧にはやらなかったともいう。

鉦の叩き方は「カーンカン　カンカンカン」であるが、それ以前は「チャン　チャン　チャンレンボン」といい、もう一代前は「チャン　チャン　チャンレンボンレンチャン」といった。「さなぶり」と同じである。

各戸を回って集会所に戻ると、豆腐と菓子、使った笹竹を持って本勝寺（日蓮宗）の南側の山の神へ向かう。薄暗くなった中を山の神につくと、２つの藁のお皿に豆腐を半分ずつ乗せて供える。笹竹を祠の横に納めてから、お菓子も供えて山の神に手を合わせて拝む。終ってお菓子を持って集会所へ戻る。ここではお金は分けない。事前に区の集会の時集めておいたお金で買った豆腐を参加者全員で食べ、最後にお菓子を配って解散する。

以前は笹振りが終わるとすぐに年長者はもらった米を自転車に付けて売りに行き、そのお金で豆腐とお菓子を買ってきた。それから山の神にお参りして供えた豆腐を少しずつ箸で分けてその場で食べ、残りの豆腐とお菓子を子どもたちで分けたという。

山の神の祠は、４本の女竹の柱の上に屋根を新藁で水平に葺いたもので、この地方の地の神さまの作り方と同じである。高さが50cmほどあり、中に20cmほどの石に山の神と彫ったご神体がまつられている。

この行事は、疫病が流行したとき山の神に祈ったところ治ったので、子どもの無病息災を祈ってお供え物を勧進して祭るようになった。「勧進というのは山の神に供えものをくり

ょう（ください）」という意味だといわれている（資料13）。

これと同じような山の神祭りは袋井市岡山にもある。日時も、方法も、供物の豆腐も同じであるが、岡山は真夜中に男子だけで行っている。

4　子どもの行事の特徴

これまで各行事の実態をみてきたが、行事の特徴をまとめておこう。

（1）子どもの行事

高御所三区の回覧に「なぜ子どもがやるの?」という質問に、「霊は心の清らかな子どもに宿るとされています。」と答えている（資料編8）。まさにその通りであろう。純真な子どもだからこそ神と同一化して福を招くことができ、不安なものや怖いものを追い出す威力をもつと考えられていたからだと思われる。

子どもといっても参加できるのは男の子だけであった。小学生から中学生までの子どもたちで、若者組（後の青年団）に加入する前の年令で構成されていた。少子化によって子どもの数が極端に減少してきた平成時代になって女子も参加するところが増えてきたが、まだ男子だけというところは少なくない。この男の子だけの行事であるという伝統は、行事が終ってからまだ参加できない幼児の男の子にお菓子やお金を届けているところがあることにもあらわれている。子どもの無事の成長と、仲間となって将来一緒に行事をすることを祈って行うのである。男の子に限定しているのは地元に残って地域を支えてくれることを願ってのことであろう。

（2）夜中の行事

神々の祭りは夜に行うことが多かった。それにならって子どもたちも夜中に送り神の行事をするようになったのだろう。それは悪霊を追い払うには夜の闇が必要であるからである。魑魅魍魎（ちみもうりょう）は闇の中で魔の手を広げて災いを起すから、それを追い払う行事は神が活躍する夜中になるという仕組みである。そして悪霊を追い払う効果をあげるためにわざわざ鉦や太鼓を叩いて大きな音をたてるのである。鉦をよく磨いて準備するのは清らかな鉦でよい音を出し、悪霊や精霊を遠くに遠ざけようというためである。

すべての家を払い終えて明るくなってから親方がもう一度各家を回って集金してくる「さなぶり」のところがある。また家を払ってから次の家に向かうとき音を立てないように静かにまわるという「送り盆」のところもある。夜中に起こしては申し訳ないという心遣いであるが、そんな遠慮はしなくてもいいようである。起きてきてオヒネリをくれるまで鉦を鳴らし続けるとか、一度他所を回ってから再び訪ねるところもあるからである。袋井市の山の神祭りの記録に、「毎年起きてくれない家もありますが、迷惑でも必ず声を掛けます。声を掛けないのはハブセにしたことになるからです。」（資料編14）とあるように、子どもの行事であっても公の行為であるから抜かすことは差別することになった。厄払いをするという古くからの風習を几帳面に守っているからこそ夜中に行うのだから、各家では子どもたちが来るのを身を慎んで迎えなくてはならないものであった。そしてお礼としてオヒネリ（謝金）を渡すのである。

（3）オヒネリの分配

神になった子どもたちが現実に戻って喜びを感じるのは、貰ってきたオヒネリを分けてもらうときである。勧進を要求するのも、その分け前が多いことを願うのも、純真であるがゆえに欲望丸出しの子どもの特徴である。

分け方は年齢階梯制、年功序列である。小さい子から分けていき、残った分は親方など最上級生がもらうという方法と、親方が半分、いや２／３ほど確保してから下級生に分配する方法とがある。いずれにしても分け前は上級生と下級生とは雲泥の差がある。下級生はそういうものだと観念し、早く大きくなりたいと願ったものだという。ある地域でＰＴＡの指導でみんな平等に分けるようになったが再び元に戻ったという。現在、均等に分配しているところ、子供会の会計に入れるところもあるが少数派である。

分け方で変わっていたのは原川で、５年生が下級生に分配してから６年生の家にもっていったことと、岡津では、分配の額が決まると少し余らせたお金を公会堂の中に隠して下級生に探させて楽しみの時間を作っていたことである。

川久保の山の神ではオヒネリとかお礼とはいわず勧進だという。山の神への供え物の寄付金だというのである（資料編13）。送りをしたお礼にせよ、神のお供えを買うための寄付金にせよ、いずれにしても貰ったお金は、どこでも最上級生が年齢別に、また任務に応じて分けている。

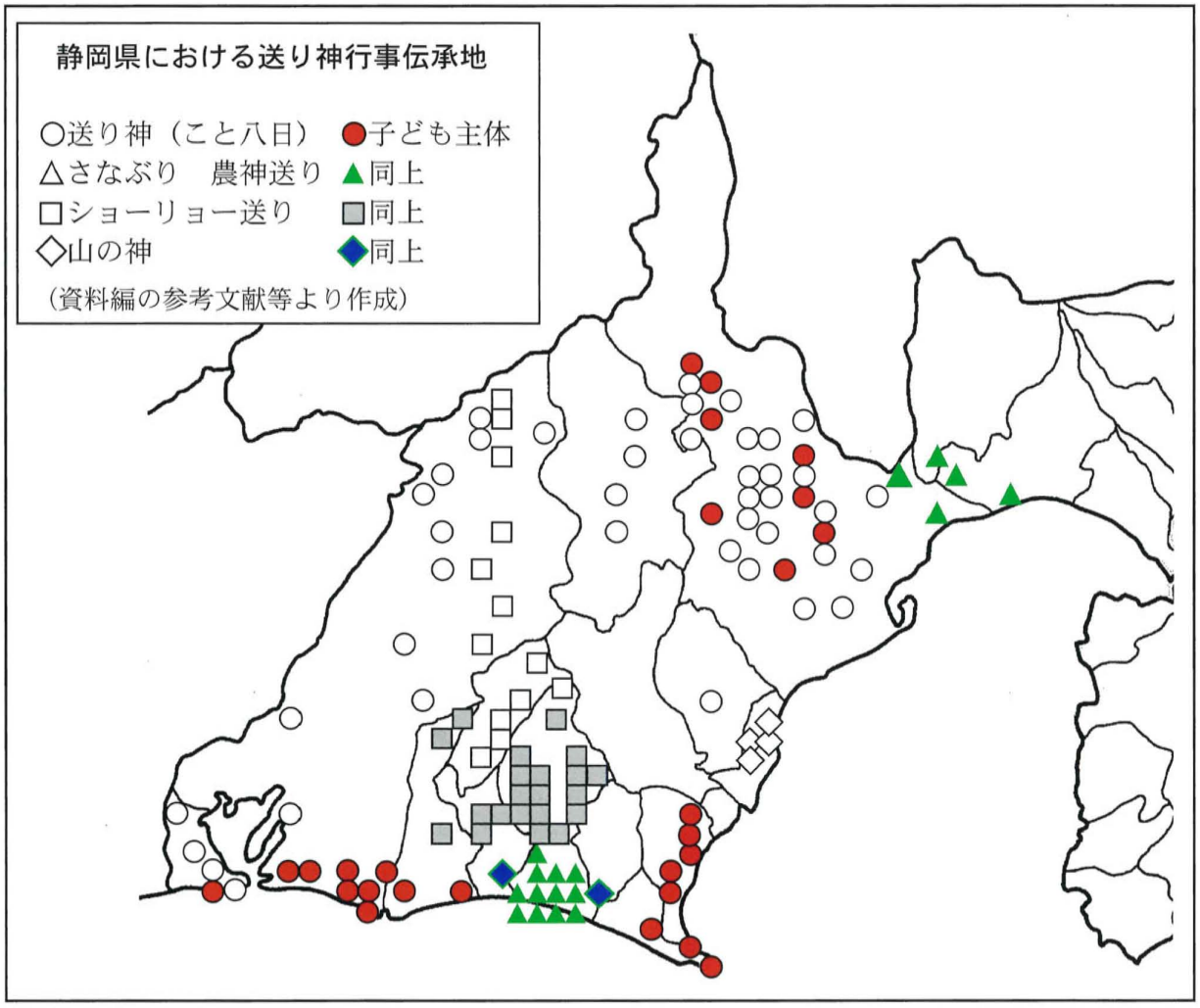
不平等となっているのには理由がある。親方は、撞木とりや笹竹の準備、鉦や荷車の借用と返却、当日もらった米や麦の換金と分配などに報酬がついてきたのだといえる。すべてが子どもだけで運営される行事であるから責任が大きかったのである。

これが大人社会の実態を垣間見る社会勉強の１つとなった。親方はこのような行事をやり遂げて大きく成長するのである。最近は交通事情の変化や夜中の不審者の出没、あるいはシデの作り方などで町内会や子供会の役員の指導と付き添いが必要になってはきたが、いまだに子どもの自主性に任せて口出しは一切しないという地域が多い。

（４）笹の利用

遠州の子供たちによる送り神の行事は、すべて笹竹を用いている。なぜ笹竹を用いるかというと、まず悪霊を払うための道具としてホウキやチリ払いのようなものが必要であったからである。それは木の枝よりも長くて真っ直ぐで弾力があって折れにくく、握りやすい上に、身近にあるからである。また新竹を使えということからわかるように、ケガレがなく、ツヤツヤしていて生命力を感じさせるものであるから、払うという目的にもっとも合致しているからであろう。

さらに大事なことは、この笹竹は単なる笹竹ではなく、ボンデンとかヘイソク、あるいはセガキバタといわれるように、幣束や施餓鬼旗を付けた神聖な神や精霊が宿る依り代であるからである。富山昭氏は「神を降臨させるための依り代であり、そこに神霊がいますものとの観念から、御幣は不浄を祓い清める道具として使用される」と述べている（『新居町のこと八日行事』）。



この笹竹に洗米や銭をつけているところが各地にあるが、これも神の依り代であり、旅立ちの弁当である。

お清めと禁忌

すべての家々を払い終って笹竹を集めたとき、笹竹にお酒を吹きかけて清めをしているところがあった。さなぶりをする雨垂では、笹竹の上に鉦を乗せてお酒を２合くらい、年長者から順に吹きかけてから川へ納めに行った。疫病とか悪霊を笹竹で追い払っただけではなく、その手段に用いた笹竹に酒を吹きかけて清めるほど徹底していた。袋井市岡山の山の神祭りでもお供えの豆腐や煮豆を食べると同時にお神酒も口にするが、これも神人共食であり清めの意味もあるのであろう。

笹竹を川とか村境へ送ってからは絶対に振り向かないという禁忌も、捨てた悪霊が戻ってこない作法であった。これらは目に見えない悪霊・精霊に対する徹底した忌避が凝縮されている行為である。葬列は同じ道を通らずに帰ってくるというのと同じである。

（５）ショーリョー送りと笹振りとの関係

子どもの行事を中心に考えてきたが、大人と一緒に行っている行事もある。それはお盆のショーリョー送りである。これには２通りある。１つは北遠から掛川市にかけて行われている初盆灯籠を送る行事で、浜松市天竜区水窪町では村の人がそろって夕方に水窪川へ送っていく。春野町では麦カラの束をドーナツ状にして太い竹で固定し、その上に盆提灯を灯して気田川へ流している。川根本町では大井川に流した。基本は同じであるが森町から掛川市の北部の山間部では、盆の間松明をつけて燃やしていた笹竹に米を入れ、施餓鬼旗ではなくて御幣をつけて、家の中を払ってからオショーリョーを村境に送っていく。これを送り神とか虫送りといった。この代表が柚葉やその周辺である。

もう１つは平野や篠場などで、子どもだけで夜中に笹振りをする行事と夕方に村人みんなで施餓鬼旗と盆灯籠を送る行事を行っている。

地域の人たちがみんなでショーリョー送りをするといっても、柚葉やその周辺のようにシデを用いて送り神をする方法と、平野や篠場のように施餓鬼旗をつけた笹竹で各家を払ってからみんなで送っていく方法とがあった。

この中間的な施餓鬼旗送りは、森町から磐田市、袋井市などで子どもたちが16日か17日の昼間に、施餓鬼旗を集めて送っていく方法である。しかし、これは笹振りはないから施餓鬼旗を笹竹につけて振る掛川市で行っている行事とは異なる。ここに掛川市における笹竹を振るという行為がクローズアップされてくる。

つまり、ここの盆の行事は「さなぶり」や「山の神」と、さらに他地区のこと八日の笹振り行事の影響を強く受けている方法であることがわかる。

だから笹振り行事は仏教の宗派とは無関係で行われる。遠州は曹洞宗が多い。とくに天竜川以東では80%近くも占めるというように極めて多い土地柄であるから葬儀や年忌ばかりでなくあらゆる生活習慣がほとんど同じであるが、中には他宗派の家もある。高御所には浄土真宗の家があり、その家では施餓鬼旗をまつるという風習はない。しかし子どもたちの笹振りのときにはオヒネリを渡しているし、日蓮宗の家も同じように行なっている。宗派にとらわれず地域全体の行事として定着しているのである。

（６）唱えごとの類似性

Ａ．ヤイト

「さなぶり」のときに「ネンネコヤイト　ホーホラヤイト」とか「ホーホラヤイト　ネンネコヤイト」、「チャンチャコヤイト」、「デンデコヤイト」などと唱えてまわる。このような「ヤイト」という言葉は浜松市でも各地で使われている。２月８日と12月の８日に行われるコト八日の送り神行事に多い。たとえば西鴨江では「ヤイトー　ヤイトー　笹もちヤイトー、西（東）の川へ送りっちょ」といい、行事そのものを「ヤイトー」と呼んでいる。坪井も「ヤイトウ　ヤイトウ　笹葉のヤイトウ」といい、浜松市東部の大塚町・飯田町・松島町・西島町・河輪町などは「オンベイヤイト」という言葉を共通に用いている（『新居のこと八日行事』、『静岡県の祭り・行事』）。磐田市海老島も「やいとうと大声をあげる」（資料編20）という。

さらに、送り盆のとき掛川市の平野では「ヨイトコ」、その隣の篠場では「ヨイトコ

モイト」、正道と水垂区上組では「ヨイトコサッサァ」という。磐田市大楽寺の16日の盆の送りも「ヨイトコ　ヨイトコ」である。このことについて「語源は定かではないが、亡くなった霊魂が無事に極楽浄土に昇れるようにとの願望が込められているのではないかと思われる」（資料編６）とか、「よいとこ、さっさあ」（よい所よい里ちゅう厄払いのならわし」（資料編10）と解釈している。浜松市江之島ではコト八日のときに、「ハラオー（払おー）オクリガミ（送り神）ノミノカンゼー（勧進）　ヨイトーヨイトー」のようにヨイトーという言葉を使う。浜松市金折には「ヨイトー」という夏の行事がある。大きな麦ワラの束を抱えて火をつけて天竜川に送るというもので、祇園の疫病払いと虫送りが習合された夏の送り神の行事である（『静岡県の祭り・行事』）。

浜松市の昭和初期の虫送りのとき「長松明を携えて、秋葉神社から借りて来た火をこれに移し、燃えているのを高く掲げて、打ち振りながら、よいとうと、よいとうと　何虫をおくる　うんから虫をおくる　と唄いながら、双盤を鳴らして、二張りの提灯を先頭に、田の畦間を隊を組んで歩き廻って、村境に至って害虫を送り放ったのである。」とか、疫病を送るときは「よいとうと、よいとうと　何病をおくる　疫病神をおくる」と唄ったという（『遠江積志村民俗誌』）。ヨイトウトの唱え言葉は集団で歩く時の掛け声のようにみえるが、これは掛川市平野のヨイトコと同じ言葉からでているのか別なのか、定かではない。

また、ヤイトとかヨイトの言葉も本来同じなのか別なのか、どのような意味をもつのかもわからない。しかし、遠州各地の送り神行事であるさなぶり・送り盆・虫送り・こと八日の送り神などの行事に、同じような言葉が用いられていることは確かであるから、これらの行事には共通性があると思われる。

B．勧進

さなぶりのとき「送り神の勧進や　鉦にいっぱいおくんなさい」という（雨垂）。この言葉は、袋井市岡山の山の神では「山の神の勧進やい。米なら１升、銭なら50銭」（資料編14）といい、川久保の「山の神」では「ヤアマノ、カアミノ、カアカンジ」という（資料編13）。御前崎市下岬の２月８日夜の風邪の神を送るとき「送り神カンカンジー、何神送る、貧乏神送る、エートエート」と叫びながらまわった（資料編22）、牧之原市川崎のナアリ神送りでは「送り神みやかんじんだア、銭でも米でもかんじんだア」という（『静岡県芸能史』）。掛川市原川は送り盆に灯籠と鉦担ぎ棒を流してから「鉦を洗ったで銭くりょう」と言って各戸をまわり集金し、浜松市新津町ではこと八日に『八日神様のゼニおくれ」と言って各家をまわる（『静岡県の祭り・行事』）。

このような表現は各地にあったらしく、明治42年にまとめられた『見付次第』にも「袋井在の今井といふ地にては、師走の八日頃に、子供打連れ笹竹の葉へ紙を附けたるを持て村内戸毎に、コーメヤ　コーメヤ　米ナラ一升金ナラ百ダと呼りつゝあるき廻ることありといふ。」（資料編19）とある。

すなわち、この唱えごとは山の神の行事にもコト八日の送り神行事、さらに送り盆や虫送りにも唱えられていた。子どもたちは悪霊や害虫を村境に送ることから、そのお礼に米や麦、現金を勧進としてもらっていたのである。それは遠慮しながらいただくというより、もっと積極的に、むしろねだりがましく囃すところに特徴がある。これは節分のとき豆拾いにまわるときや、小正月にダイノコをもって嫁の尻たたきをするとき、秋葉山とか富士山へ参詣する道者を通せんぼして散銭を要求するときも大きな声で勧進を要求していたことと似ている。

このような脅迫めいた言葉は子どもの行事だからこそ使うことができるが大人にはいえない言葉である。このことから、送り神に関する子どもの行事は、大人社会が行なわなくなった行事を受けついで行うようになったものであるとはいえないのではないか。はじめから子どもの行事として行われるようになったものであり、また、唱えごとの類似性から子ども行事は元になる行事があって、場所や時期が異なる形に派生したものではないか、ということを推測することができる。その元の行事というのは「こと神送り」ではないだろうか。このことを最後にまとめてみたい。

5　静岡県の中における位置づけ

県内の送り神の行事を『静岡県史』資料編25（民俗三630ページ）の『静岡県における「送り神」の分布』や、第５章の参考文献などから地図に落としてみるとそれぞれの分布がわかってくる。そのうち子どもたちが行っている行事は色がつけてあるから海岸沿いと安倍川流域に多く、伊豆地方にはまったくないということがわかる。もちろん伊豆には送り神という形態はとらないがドンド焼きに代表される子どもの行事は各地にある。

掛川市で行われている、子どもたちが、夜中に、笹竹をもって悪霊などを送っていく行事は、「さなぶり」、「ショーリョー送り」、「山の神」であるが、このほか各地で「こと八日の送り神」が行われている。これは12月と２月の８日に行う「こと神」という神を送る行事であるが２通りある。大人が自分の家の悪霊を払うものと、子どもたちが集団で地区内の悪霊を送っていくものとである。

大人が主に行うものは浜松市から三河、あるいは南信州で行われている（資料編15）。子どもが主体に行うのは遠州灘に面する海岸地方で行われている。その分布は、湖西市から浜松市、磐田市、御前崎市、さらに駿河湾に沿っている牧之原市と続き(資料編16～23)、その中間に当る袋井市と掛川市にはない。その代わり山の神とさなぶり、ショーリョー送りがあるという位置づけになる。安倍川・藁科川流域と大井川上流の「こと八日の送り神」は多くの地で行われているが、この地方では笹振りはなくて簡易ミコシにワラ人形を乗せて送っている。

笹竹を利用しているのは富士川流域の田の神送りや農神送りで、さなぶりと同じように笹竹をもって歩くが、各家を払うのではなく用水や田を払っていくことと、杉の葉で作ったミコシを担いでいくところがあることが異なる。

山の神を祭ることは各地にあるが送ることは少なく、子どもによる山の神送りは袋井市と掛川市だけであり、このときも各家の軒先を夜中に払っていく。

このようにみると、掛川市で行われている三種類の送り神の行事は、すべて各家を笹振りをして清めているということがわかる。何度も述べたように、男の子たちが、夜中に、各家の悪霊、疫病、害虫、精霊等を払ってオヒネリをもらうという行事は、駿河地方にはない。遠州に似た行事があるとすると、それはこと八日の送り神行事だけである、ということになる。

全国的に行われる12月と２月の８日の夜に襲ってくるコトの神から逃れるために身を慎んで忌み籠るか、積極的にそれを払うかしてきた行事である。それを各家庭で主人がやるか、村の人が集まって集団でやるかの違いはあるが、そんな中で子どもたちだけで行うところもあるのである。その代表が湖西市大倉戸のチャンチャコチャンであり、それと同じ形態のものが浜松市から牧之原市までの海岸地帯に広がっている。その影響で掛川市も子どもによる笹振りが行われるようになったものと思われる。

ただ、地理的条件、地形的な特徴によって、用水の不安定な大渕地区ではサナブリの喜びの日に「さなぶり」を、山と里の接する川久保や袋井市の岡山はこと八日の日に「山の神」を、そして東海道筋では北遠の送り盆とこと八日の笹振りが習合してお盆の施餓鬼旗送りの「ショーリョー送り」となり、掛川市に３形態の笹振り行事が生まれたといえるのではないだろうか。

つまり、掛川市内で行われている笹振りの送り神行事の根本はこと八日行事であった。それが地理的条件や地形、他の文化の影響によって名称と実施時期が変形していったと推論しておく。これは各地の調査を通して研究をしておられる諸論考を受け入れていない極めて大雑把な推論であることは承知しているが、掛川市の子どもを主体にした送り神行事の特徴を一先ずこのようにとらえておく。

第５章　資料・参考文献

１．さなぶり関係

１、『民俗行事「さなぶり・早苗饗」調査記録とりまとめ書』

（平成13年度　大須賀町教育委員会編）
調査月日平成13年12月～平成14年３月

〔全区共通内容〕

意義;言い伝え

「さなぶり」　意義については種々の説があり、それらを総合して住民の意識としてとらえている。

①正月11日の打ち初め（現在は行われていない。田の稲株を起こし、すすきにおしめをつけ松、餅、米を供え、田の神を迎える）に迎えた田の神を一連の農作業、田植が終わり天に送る…さのぼりからきたもの

②田植えが終わり五穀豊穣を祈る　豊作祈願

③各家の厄払い　悪い神を追い払う　むし送り家内安全

④区内早苗の不足を互助で補い、さなぶりの日に全区　田植えを完了し、苗代田を片付け最後の田植えを行う。

⑤農あがり　農休みの日とする　各家で御馳走をする。

現在は③の意義が重点となっている。

実施時期

現在は大渕地区区長会で協議し６月中、下旬の日曜日としている。

以前（各戸で稲作の盛んな時期）は、６月下旬で区内の田植え状況を見て、大渕地区内で協議して決めた。曜日は無関係であり、登校日の時は、子供が学校で居眠りをする事もあった。

実施時刻

各区の子供達で未明の開始時刻を決めている。午前３時前後に鐘をたたき、起こして始めた。

〔さなぶり行事の内容で大渕地区内共通のもの〕

①前日に準備した新竹に紙のしでをつけ小学以上の男子（H.13に一部女子も加わった）が、これを持って未明に家を払って廻る。

②鐘たたきが、開始１時間位前に区内を鐘をたたいて廻り子供等を起こす。鐘は、区長所管のものを借りる。

③各家でお礼のお金（500円以内）をもらう。

④お払いが終わって後、笹竹をまとめ所定の場所（区により異なる）におさめる。その時、後を振り向かない事。（悪魔がついてくる）

⑤各家で頂いたお金を親方（年長者）が各年齢.仕事.内容に応じて配分し、残りは親方で配分する。

〔各区により独自な内容〕

さなぶり行事は、昔から未明（払暁）男子の子ども達だけで行われているので、各区は殆ど交流はなくそれぞれ独自の方法で行い、引継いできている。従って他地区の事は大人も子どもも殆ど知らない。

①お払いのやり方唱えごとについて

雨垂「おくりがみのかんじんや.かねにいっぱいおくんなさい」しでのついた竹笹で玄関、雨戸等を払う。

浜　「ほうほらやいと.ねんねこやいと」３回唱える。

中新井「ねんねこやいと.ささやいと.おおぶりやいと.ささやいと」２回繰り返し、お礼をもらった後「今年もお米が沢山とれますように」又は、「今年もお金が沢山もうかります様に」（非農家）と言う。

新井「ほ一らやいと.ねんねこやいとう」

野賀「ちゃんちゃこやいと.ほらほ一らやいと」

岡原「ねんねこやいと.ほ一らやいと」

野中「ねんねこやいと.ほ一らやいと」（以前は、「おくりがみのかんじん」を加えた）

藤塚「ほ一らやいと.ねんねこやいと」

②鐘のたたき方

各区ほぼ同じ

チャーン。チャンレンボンレンチャン。チャンレンボンレンチャン。チャーン

浜は現在、カン.カン.カン。

各区のさなぶり行事、現在実施している状況

野賀

事前準備

１週間前から小１～中３までの全員で区長宅で行う。区の役員が援助指導をする。

・しゅ木と槌を藤で作る（山側の藪で新竹を採る）

・新竹で大笹、小笹に分ける。

・榊、縄、しでを笹につける。清めの酒を用意

・役割確認
　親方　　15才（中３）
　袋持ち　　14～13才（中２、１）
　笹拾い　　12才（小６）
　大笹～小笹　11才以下（小５以下）
　親方が鐘をたたく。

当日

・午前４時頃　親方の鐘で起こし、区の東端に集合。親方の音頭で各戸の軒先を唱えごとを言い、笹持ちでお払いをする。
・鐘はこれに合わせて打つ。
・笹拾いは、落ちた笹を拾い片づける。
・東から西に廻り、最後に竜今寺川へ納める。
・帰りに絶対に後を振り向かない。違反者には鐘を頭にかぶせる。
・幼児は保護者がついて廻る。
・全部終了後、お礼をもらいに廻る。（500円以下）
　親方「さなぶりのお金をもらいに来ました。有り難うございました」
・区長と相談し年齢、役割に応じてお礼金の分配をする。

以前おこなわれていたこと

・お礼に粗麦をくれた家もあり、売って金を分配した。

新井

前日

・小１～小６で新竹を切り、大笹小笹を用意(区内の藪）し、紙のしでをつける。（平成13年から女子も参加）
・区長から鐘を借り、海岸の川口付近の真水で鐘を洗う（PTA役員援助）
・貧乏神はビニール袋用意　練り小屋で準備する。
・役割を決める
　親方　　小６集金係．鐘たたき
　貧乏神　　４．５年（笹拾い）
　大笹　　小５～小３
　小笹　　小２．１
　笹枝　　幼児

当日

・午前３時鐘を合図に区長宅に集合　お払い開始
・唱えごと　鐘に合わせて笹を振りお払いをし、区内を時計廻りに回る
　チャンチンボンデンチャン
・貧乏神が落ちた笹を拾い片づける。
・お礼（500円以下）を袋に入れてもらう。
　全員で頭を下げ礼を言う。
・終了後練り小屋前に集まり、笹をまとめ区の役員が納める。
・親方が年齢、役割に応じて礼金を分配。残りは、親方で分配。

以前おこなわれていたこと

・時期　全農家の田植終了時。６月30日～７月２日頃
・新竹は各自で用意した。
・１週間前にしゅ木とりに行った。
・大人の援助はなし。鐘たたきは、道をたたきながら廻った。
・お礼は粗麦２升～３升もらい、売って分配した。
・鐘洗いの時　海岸の"やとう"で草を使い、田植の儀式をやった。
・笹はまとめて竜今寺川に納めた。後に"経土"に納めた。
・帰りに絶対、後を振り向かないこと（魔がついて来るので）

中新井

事前

　しゅ木とり　１～２週間前、全員でどん栗のなる木を切り、しゅ木を作る。
　ごへい、しで作り　６年生の母親

前日

・竹やぶのある家に頼んで笹を全員で切りに行く（６年生父親も）
　新竹の雄竹を使う。大笹、小笹、枝笹(幼児用)しでをつける。大笹13枚、中笹11枚…以下奇数枚。枝笹５枚
・鐘　区長から借り海岸へ行って清め砂で磨く。ごへいを右巻きの縄で鐘の回りに巻きつける。
・役割を決める。
　親方、袋持ち、鐘たたき　６年生の中で（５年生も）、貧乏神…５年生の中で(笹拾い役)、大笹　４．３年生(幼児に小さい笹を届ける)、小笹　２．１年生

当日

　鐘の合図で区長宅前に集合。区長宅から始める。
・親方の合図で（イッセーノ）軒先で唱えごとを言いながら笹を左右に振りお払いをする。
　鐘は唱えごとの定位でたたく。
　　・　　・　　・　・　・　・
　　ネンネコヤイト。ササヤイト。休
　　・　　・　・　・　・　・　・
　　オオブリヤイト。ササヤイト。休
・貧乏神（笹拾い）は落ちた笹等を拾い片づける。確認。

・お礼（500円以下）をもらう。
　農家「今年もお米が沢山とれますように」
　　ありがとうございました
　非農家「今年もお金が沢山もうかりますよ
　　うに」　ありがとうございました
・全戸払い終わって大日堂集合。使った笹等をまとめ貧乏神が納めに行く（高山の東のおたちう様入口脇の竹やぶへ）。帰りに絶対後を振り向かないこと（大きな罰が当たる）
・いっさい終了後区長に鐘を返し報告をする。しゅ木をおいてくる。
・「さなぶり引継書」を次年度の年長（小５）に申し送る。
・お礼金は親方が総額を見て年齢.役割に応じて分ける。幼児も100円位。準備に欠席…減、貧乏神…増、全体で余り差がない様に。

以前おこなわれていたこと
・実施時期、全農家の田植終了後に行った。
・鐘のお清め　大溝川の河口付近で早苗の残りを使い、根で鐘を磨いた。
・しゅ木には藤蔓をつかった。
・双盤（大きな鐘）も使った。戦時供出のため今はない。
・お礼に粗麦をもらい、これを売って金を分配した。
・双盤は小さな鐘の途中に打ち全体のリズムをとった。

岡原

前日
・小１～中１の男子で準備
・笹竹を夏目さんの竹やぶでもらい、紙のしでを１本の竹に20枚から30枚つける。
・鐘.しゅ木は区長から借りておく。
・役割を決める
　鐘たたき（親方）　中１
　お礼貰い　　小６
　紙拾い（笹拾い）　小５
　電灯持ち　　小４
　笹持ち　　小６～小１
・２班（県道の北.南）に分ける。
　北側　小笹を持つ。道が複雑な為、道を知っている者
　南側　大笹を持つ。道は簡単である。
・銭がめ堂の縁で準備する。

当日
・午前２時頃鐘の合図で西の端に集合。
・北側と南側に分かれて各戸の軒先でお礼もらい（小６）の合図で唱えごとを言いながら、紙しでのついた竹を左右に振り、お払いをする。
・東へ移動
・鐘たたきは、自転車で区内をたたいて適当に移動する。
・お礼（500～100円）を頂き、紙拾いは、落ちた紙や笹を拾い片づける。アパートは省く。
・鐘の打ち方　カン．カン．カンカンカンカンカン。
・全戸終了後、東端の大石さん前に集合。
・竹を集めて全員で、竜今寺川堤へ納める。
・お礼金は　中１・小６で相談して分配額を決める。（年齢に応じて）
　大体　小１　600円～800円
　　小６　7000円
　　中１　10000円位
・大人の援助はない。

以前おこなわれていたこと
・廻り方　西組⇒東組を全員で行った。
・１週間前の日曜日、山へ鋸を持ってしゅ木とりに行った。
・鐘を砂.早苗で磨いた。
・参加は小６までであった。
・お礼は穀物の時もあった。

浜

前日
・小１～中３まで全員で頼んである家から新竹を貰って、紙のしでをつけ、中３の親方の指示で班分けをした後、笹を持ち帰る。
・鐘たたきは、区長から鐘を借り準備する。しゅ木は使っている物(新しく作っても良い。)

役割
　中３　総指揮．鐘たたき．グループ分け．点呼．見廻り．お礼の分配
　中２　先導
　中１・小６　大笹ふり　終了後、お礼をもらいに廻る。
　小５・小４　笹拾い
　小３～小１　中．小笹ふり

当日
・午前２時頃鐘たたきが鐘をたたいて起こす。
・お灯篭さま前に集合　若宮神杜参拝後、東西南北４班に分かれて能率良く廻る、鐘はカン．カン．カンと打ち自転車で区内を廻る。先導が先に立っておちのない様に。
・各家の軒先で指揮者(親方)の合図で唱えごとを言いながら、一斉にお払いをする。３回位。
・各班終了後、お灯篭さま前に集合。
・笹竹等まとめ区所有地（天神様裏）に納める。
・行事終了後中２～小４の子どもで各戸にお礼をもらいに廻り（挨拶）、集まった総額から

各学年係に応じて分配.親方（中３）は残金を分配する。大人の指導はない。

以前おこなわれていたこと

鐘たたきは前日につき粉.早苗でよく磨く（親方がよしと言うまで）

鐘のたたき方　チャン。チャンレンボンレンチャン。チャンレンボンレンチャン。

廻り方　西やけ　東やけに分けて廻った。

しゅ木とり、20日位前の日曜日に全員弁当持参で山にしゅ木をとりに行き、適当な物５～６本作り、池にひたしておいた。４年生以上の時あり。

お礼は終わった後、親方以外で各戸を廻り粗麦を５合～１升もらい親方がこれを売り、代金を分配した。

終了後、竹笹をまとめ、笹拾いがお天神様の裏へ納めた。

しゅ木とりの役割（昭和中期）４年生以上

４年生　　弁当持ち　（みんなの弁当をかついで行く）

５年生　　しゅ木持ち（切ったしゅ木を袋に入れ持ち帰る）

６年生　　しゅ木切り（適当な木．枝を鋸で切る）

中１年生　全体まとめ

野中

前日の準備

・準備の場所は野中公会堂で小６．中１・２年の男子と父兄で準備。

・新竹を貰い、大笹．中笹．小笹に切り、紙のしでをつける。

・鐘を竹に吊るす。

役割の決定

親方……中２の中から選ぶ。

鐘たたき……中１

笹竹持ち……これ以外全員

大笹．中笹…中２.１

小笹……小学生

笹拾い……４.５.６年の中から決める。

全体を３班に分ける。

当日

・午前３時頃、鐘たたきの合図で起床し、各班の最初の家に集合。

・親方の指示で庭先に入らず、家の門先で唱えごとを唱えてお払いする

・お礼（500円以内）をいただいて、次に廻る。

・鐘たたきは区内をたたいて廻る。

○－○○○○○、○－○○○○○

・笹拾いは落ちた笹葉を拾う。

・公民館へ集合。笹竹の片付けをする。

・最終片付けは、区の三役が行う。

・お礼の配分は、親方が決める。例えば小１を１とし;2;3……

以前おこなわれていたこと

・開始時刻が午前１時頃のこともあった。

・事前に山へ行って雑木を切り、しゅ木を作った。

・鐘をふもんじ草できれいに磨いた。

・唱えごと　ネンネコヤイト。ホーラヤイト。「オクリガミノカンジン」と言った。

・各戸の軒先まで入り、雨戸等を笹で払った。

・鐘は列の先頭に立ってたたいた。

・お礼は、粗麦一升が普通。

・全区を全員で廻り、最後は東大谷川に納め、振り向かないように帰った。

・農休日とした。

藤塚

事前準備

前日

・午後小１～中１男子全員と父兄で練り小屋に集まり、笹竹１人1本、太い竹（ぼんでん用）２本、しでをつける。

・鐘.しゅ木を区長より借りる。

・竹は大倉さんのやぶでもらう。

・役割決定

中１　　親方、ぼんでんの竹、鐘たたき

小６以下　笹竹。

小１　　笹拾い（袋用意）

・２班に分ける。（西側.東側）各５人位。

・意義について父兄が話す。

当日

・鐘の合図で、午前３時集会所（東西の最初の家）に集まる。

・３時30分開始　５時30分終了。

・鐘は区の中を移動してたたく。

・親方の指示で各戸の玄関で唱えごとを言って親方以外全員、笹竹でお払いをする。

・家の人が出てくると親方が玄関で、ぼんでん竹をポンとついて「家内安全.五穀豊穣」と唱える。

・お礼のお金（500円以内）を頂き、お礼を言い、次の家へ移動する。

・鐘は、1時間前から区内をたたいて廻る。

○－○○○○○－○○○○○－○

・終了後練り小屋に集合。親方の親の車（トラック２台）で150号沿の家に行き、終わって全員で海に納める。

・お礼の金は親方が年齢．役割に応じて分配す

る。幼児の参加者にも菓子を分け、残りは親方が分配する。
・ぼんでんは、太めの竹を背丈位に切り、上端を裂き大きめのご幣をつける。(大人が作る。)

以前おこなわれていたこと
・お礼に粗麦をもらい、売って分配した。

雨垂

前日
・小６～小１．お寺へ集合。裏山から新竹を切り出す。
・大笹（小３）中笹（小２）小笹（小１）に紙のしでをつけて分ける。
　親方を中心にして行う。
・鐘を区長から借り（しゅ木も）磨いて鐘たたきが持ち帰る（小５）。
・笹拾いは各自.袋（かご）を準備しておく。
・区内を、４班に分かれ、廻る順.役割の確認をする。
・鐘のたたき方練習

当日
・鐘たたきが午前２時頃区内を鐘をたたいて廻り、起こす。
・４つの班に分かれ、お払いをはじめる。大体西から順に、おちのないように廻る。
・「おくりがみのかんじんや.かねにいっぱいおくんなさい」と唱え各家の玄関.縁先等を笹で払う。大笹．中笹．小笹
・家の人が起きて出てきて、お礼の金を親方に渡す（500円以下）
・「ありがとう」と礼を言い次の家に移動する。
・終わった後笹拾いが、落ちた笹の葉を拾い片付けていく。
・分担の範囲が終わったら、お寺へ集まる。
・笹を集めごみ処理をする。
・親方が、年齢．役割に応じて、お礼にもらった金を分配する。
　小１で700円位　親方が残りを分ける。同年齢者が多ければ分け前が少ない。大体１万円位か?
　平成13年から男子の数が少ないので、女子も参加させている。

以前おこなわれていたこと(昭和40年代頃以前)
・しゅ木とり．鐘みがき　１～２週間前の日曜日に鐘たたき以上の子どもで東大谷の山へしゅ木を採りに行き、うばめかし等の適当な枝を切ってしゅ木を５～６本作った。帰ってお寺で鐘の練習をやった。
・鐘をかつぐ棒は、新竹を２m位に切り５～６本束ね　おしめをつけて準備した。（前日）
・全区を全員で、西の端の家から廻った。
・お礼に粗麦を２～３升もらい親方が袋を持ってかついで歩いた。終わって穀物屋へ売り、分配金に当てた。
・全区終わりお寺へ笹を集め、その上に鐘を乗せお酒（２合位）で年長から順に吹きかけお清めをし、笹拾いが東大谷川（柳瀬）へ納めに行った。絶対に振り向かない事。

２、さなぶりの行事

（『大浜町誌』大浜町誌編纂委員会編、大浜町・昭和41年発行）

さなぶりの前日ごろから、惣代の家にしまってある鐘を出してもらって磨く。

双盤を鳴らす字もある。撞木を取りに行く。そして鐘の叩き方の練習を前半日ぐらいする。双盤には直径一メートルほどのものもあった。さなぶりには暁に起きて、皆惣代の家に集まり、きのう用意して置いた新竹に御幣をつけて貰い、あらかじめ定めた役に着く。

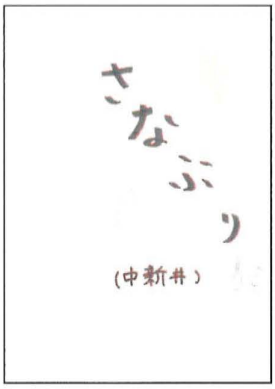
年かさの者が
　でんでこやいと
　ほゝらいやいと
といい、竹で各家々の入口で振る。このうたは、土地によって、少しずつちがうが、本町はこのようにいったようである。また、この風習はまだ子どもによって、いくぶん続けられている。往古の厄病よけや、害虫駆除(むしおくり)と関連をもつ習俗である。

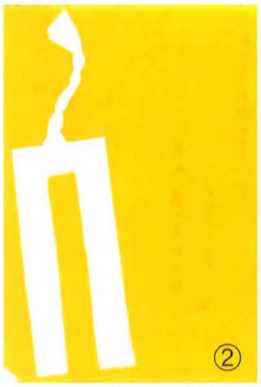
３、『さなぶり　中新井』

（中新井子供会）

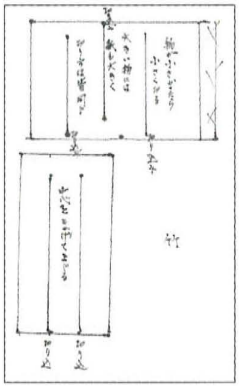
・鐘につけるシデ①　四枚　つけるときは右まきのなわでつける
・竹につけるシデ②　物が小さかったら小さく切る　大きい物には紙も大きく　切り方は皆同じ
・「ささ」につける　奇数（９.11.13枚くらい、小さい子のは３.５枚）　☆ささは雄のささ

前日の準備
　鐘
　　１区長さんの家に行き、鐘を預かってくる。
　　２鐘をみがく。
　　３シデの紙を左まきのなわで鐘のまわりにしばりつける。
　ささ
　　１ささを取りに行く（ただし持ち主にしっかりとことわること）。





シデ



シデのきり方

２幼稚園以下の男の子の人数の数も取る（小さいささ）

３ささにこよりシデをつける。

・小学生のは9.11.13枚と奇数

・幼稚園以下のは小さいため５枚くらい（奇数）

４ささは今年出たものを使う。

その他

１びんぼう神、鐘をならす人などを決めておく。

当日について

１、１番最初に区長さんの家からやること

２、１番最後はお堂　３～５回やる。

３、言い方

ネンネコヤイト　ササヤイト

・　　・　　・　・　・　・

オオブリヤイト　ササヤイト　　と言う

・　　・　　・　・　・　・

（下の点は鐘をつくところ）

４、１つの家がおわったとき！

・農家「今年もお米がたくさんとれますように」

・そのほか「今年もお金がたくさんもうかりますように」と言うこと

５、びんぼう神はみんなが行ったあと、何もおちていないようにすること！

・時計回りに回る

６、ささをすてるのは集合場所の西にあるお墓へすてる（くようする）☆お墓から集合場所へ帰ってくるときはぜったいにうしろをむいてはいけない。とてつもなく大きなばちがあたる！！

７、鐘を区長さんの家にかえしてくる（ぶじにおわったことをほうこくすること）

８、お金について

・１年から６年生までだいたい同じ、または近い金額にする。☆幼稚園以下の男の子全員にやること

・びんぼえ神は同じ学年の人より少し多くする。（このことに関しては６年生にまかせる）

☆さなぶりがおわったら、このファイルは５年生にわたすこと。

※だんだんとお米を作る家が少なくなってきてしまったため「やめたら」との声が聞かれる。しかし、今までずっとやり続けてきたもの、ここにしかないものだから絶対に続けていくべきだ。そのためにも６年生を中心として、伝統をうけついでいかなくては、いつかやめなくてはいけなくなるのではないだろうか。

一つの行事を自分たちだけでやってみようではないか！

平成15年度連絡事項

・白い紙は現在有りますが、なくなった時に購入。

・縄はその年で支度するが、（氏名略）さんが仕度出来ない場合作ってくれます。

（今までは子供がいない為、お礼として1000円程度のお菓子、15年度は（氏名略）さん宅で仕度してくれました。

※平成21.22年度は（氏名略）さん宅にお願しました。）

【大須賀町の調査報告書の原票に次のような記録がある。「年に一度の行事であり、その時を過ぎると一年先まではほとんど話題になることもなく、やり方がわからなくなって（あるいは変って）いってしまう心配があるため中新井区では『さなぶり引継書』なるものがあり、今年の行事が終ると、これを次年度の年長（５年生）に申送ってできるだけ正確に継承されるようにしている。」　これにより、上記の記録が『さなぶり引継書』だと思われる。】

４、さなぶり

（『大須賀町誌』1980年発行）

田植のすんだ祝い。部落で日をきめて行う。

もともと田の神を祭り豊作を祈願するための休日で、田植に働いた人たち―やといど―の慰労デーともとれるお祭りである。

大淵地区では部落毎に子どもだけの行事があり、さなぶりと言えばその行事をさすようにも考えられるほど、昔と同じ形で続けられている。

前の晩御幣をつけた若竹一本を用意、当日未明一斉にこれを持って出る。ピカピカに磨き上げられた鐘（区長さんからかりる）が鳴っている間に集まる。

参加者は五、六才から十三、四才までの男子で、親方、鐘たたき、袋もち、笹拾い、大笹、小ざさなどそれぞれの役割がある。集合するとグループにわかれ各戸の軒先を回り、親方の合図で、

「チャンチャコヤイト、ホウホラヤイト」

と唱えことばをくり返し、若竹の先ではらう。

こうして一軒残らずおはらいをすると、はらった家ではなにがしかの荒麦をお礼にくれた。親方か鐘たたきはずっとその間も鐘をならし続けている。その鐘は

「チャーンチャーン、チャンデンボンデンチャーン」

と鳴るという。笹拾いはちらばった笹を拾って歩く。まわり終わると笹拾いが若竹を集めて、きめられた所へ納めて朝の行事は終る。

その日学校から帰ると再び集まる。お礼をもらった麦を米屋で買ってもらい、その金を年令とか役割に応じて親方が分配してくれ、残りは親方の分け前となる。大正の初め頃、下級生が一銭か二銭の分け前をもらい、大喜びで家へ飛んで帰ったものであった。

昭和二十年代頃までは、しゅもく取りなどの準備に数日を費やしたが、今はそのようなこともなく簡略化され、お礼もお金ですます。また近年は日曜日が定例となった。

唱えことばは次のようである。

野中　ホーホラヤイト、ネンネコヤイト　オクリガミノカンジ（くり返し唱えることは各部落同じ）

雨垂　オクリガミノカンジンヤ　カネヲイッパイオクンナサイ

藤塚　ホーホラヤイト　ネンネコヤイト

浜　ホーホラヤイト　ネンネコヤイト

新井　チャンチャコヤイト　ホンホラヤイト

野賀　チャンチャコヤイト　ホーホラヤイト

岡原　ネンネコヤイト　ホーラヤイト

中新井ホーホラヤイト　ササヤイト　ネンネコヤイト　ササヤイト

付記、東大谷は昔この日百万遍をやり、子どもに菓子をふるまった。今はお日待ちとなり、子どもにお菓子をふるまうことは同じである。

なお中新井は前日の夕方行うように改められた。

5、年中行事　六月

（『小笠郡誌』大正４年）

農村にては田植終りの日を定め之れを休日とす、名づけて「さなぶり」と云ふは古来名主・庄屋より是の日を村中へ触れ出したるにより早苗触の意なるか。

2．送り盆関係

6、ヨイトコモイト

（区誌「相生」掛川市篠場区、2004年10月）

この行事は、二つの部分から成り立っている。一つは未明の笹振り。篠場では俗に「ヨイトコモイト」と呼んでいる。もう一つは、盂蘭盆の夜に施餓鬼旗や盆提灯を村外れに送って燃やすという精霊送り行事である。

1 笹振り

８月24日、盂蘭盆の夜が明ける前の４時頃から、男の子どもたちが地区内の各家々の軒先を赤や黄の施餓鬼旗の付いた笹竹で「ヨイトコモイト」と言いながら祓って廻る伝統的な行事である。

「ヨイトコモイト」の語源は定かではないが、亡くなった霊魂が無事に極楽浄土に昇れるようにとの願望が込められているのではないかと思われる。

地区の西の大将が鉦（かね）を叩きながら西の端から出て来る。東の大将が太鼓を叩きながら東の端から出て来る。鉦と太鼓の音が聞こえ始めると、各家から子どもたちが手に手に笹を持って、極楽寺前に集まって来る。子どもたちが集まると二手に別れて。６年生が「笹振り大将」となって総指揮を取り鉦・太鼓を叩き同時に出発する。西のグループの笹振りと呼ばれる子どもたちが「ヨイトコモイト」と声を合わせて言うと、それに合わせて鉦をチャン、チャカ、チャンと叩き、東のグループの笹振りが「ヨイトコモイト」と言うと、それに合わせて太鼓をドン、ドコ、ドンと叩く。その掛け合いがしばらく続き、お互いに西半分、東半分の各家々を歩いて廻る。そして家の玄関前で大きな声で「ヨイトコモイト」と唱和して、施餓鬼旗を付けた

笹竹で軒先のお祓いを始めると、家人が出てきてお布施（オヒネリ）を渡す。今では、この時に仏前の施餓鬼旗を渡す家がある。昔は子どもが多かったので前日までに近所の家へ施餓鬼旗を貰いに行った。この施餓鬼旗は正法寺の和尚さんがお経をあげに来た時に持ってきたものである。

初盆の家ではお布施を多めにして盆提灯を渡す。提灯役はそれを貰って引き伸ばし、竹に通して二人で担いで行く。昔はトーロンと言う長くて綺麗な提灯や家の形をした提灯でローソクを付けてくれたが、最近は岐阜提灯になった。

なお、お布施を貰って歩く役を「乞食（コンジキ）」と言った。

このようにして各家々を祓って廻ってくると、およそ１時間程度はかかるから真っ暗であった空は明るくなり、お互いの顔もはっきりと分かるようになる。

極楽寺にもどってくると大将たちは集めたお布施の勘定をし、勘定が終ると提灯やローソク代、荷車（大八車）・引き綱の借用代等を差し引き、残りのお金の半分以上を大将たちが確保してから年齢に応じて分配する。お金の分配に関しては大人たちが口をはさむことは一切できないことになっていた。

「ヨイトコモイト」に参加できる子どもは、小学校１年生から６年生の男子に限られこのように行われてきたが、昭和60年頃からは小学生の数が減り、幼稚園の男子も参加するなど「ヨイトコモイト」のやり方も少しずつ変わってきた。

平成13年からは更に子どもの数が減ったため女子も加わることになった。

２　精霊送り

子供たちは「ヨイトコモイト」を行ない、お金の分配が終ると夜の精霊送りの準備にかかる。まず大将はそれぞれの役割を決める。６年生はお寺の山に行って椎の立ち木を取ってくる。昔は枝振りのよい松の木を使ったらしいが、現在では椎の木などにしている。荷車や引き綱も借りてくる。

５年生は掛川市街まで提灯やローソクを買いに行く。４年生は盆提灯を焼く穴を掘りに行く。準備ができると荷車の真ん中に椎の木を立て、後に大太鼓、前に二つの小太鼓を取り付け、椎の木にホウズキ提灯を吊り下げる。手木（てぎ）に長めの棒を取り付けて舵をとりやすくし、小太鼓を叩く子どもが座る板を敷く。太鼓の胴には笹振りに使った笹や施餓鬼旗を丸めて巻きつける（以前は笹振りに使った笹を椎の木に合わせて縛って立てた）。準備ができると一旦解散してから夜の７時頃前に極楽寺前に集まる。７時過ぎ頃になると地区民がお寺の門前に集まって来る。初盆の家の盆提灯を持った子どもを先頭にして並び、ホオズキ提灯を持った子どもたちが引き綱を持って荷車を引く。手木の横にいる二人の子どもが荷車の舵をとる。荷車の前側には小太鼓を叩く低学年の男子が乗り、荷車の後の大太鼓は世話役が歩きながら叩き、その後で笛を吹く。荷車の前後は地区民が一緒について歩く。太鼓、笛のリズムに合わせて荷車を進め坂道の少し広いところでは休憩する。

盆提灯や施餓鬼旗などを焼く送り場は、極楽寺から東に約１ｋｍ離れた西山沢川のほとりの山裾にある。そこに決められた穴があり、その中に施餓鬼旗のついた笹を入れて火をつける。その火で子どもたちが盆提灯を焼いていく。見送りにきた人たちは合掌して精霊を送る。全部焼き終わると荷車とともに皆帰っていく。

昔は道が悪くて八幡神社の前から荷車が入らないので、多くの地区民はここで帰り、子どもたちと大人の代表だけが暗い道を通って燃やしに行った。盆提灯などが燃え尽きると子どもたちは帰ってしまい、４年生の穴掘役だけが水を掛け土を被せて火気の安全を確かめてから帰る。この時真っ暗で木が茂る林の中であるから心細くなる。「お化けがでるの変な声がする」のと怖い話しをしていたから余計に不安になって恐々帰ってくる。怖いから駆け足となる。先に帰った子どもたちが草と草を結び合わせていったからその中に足が入って転んでしまうことがある。帰った筈の子どもたちが突然林の中から飛び出してきて驚かすこともある。「振り向くとオショロさんがついてくるから、振り向いてはいけない」などと言われながらも無事に極楽寺へと帰った。

帰ってくると大将の指図で荷車を片付け、謝礼を持って借りた荷車などを返しに行き、子どもが主役の精霊送りが無事終わる。

７、曽我の行事あれこれ

（曽我小学校PTA広報紙「わかば」平成３年）

―「精霊送り」って何？―

先祖の霊をお迎えして盆の供養を終え、さらに、巡り来る来年のお盆までと別れを惜しみながら、極楽浄土へと旅立たれる御精霊様の見送りをし、先祖の霊に感謝して自分自身が「人間

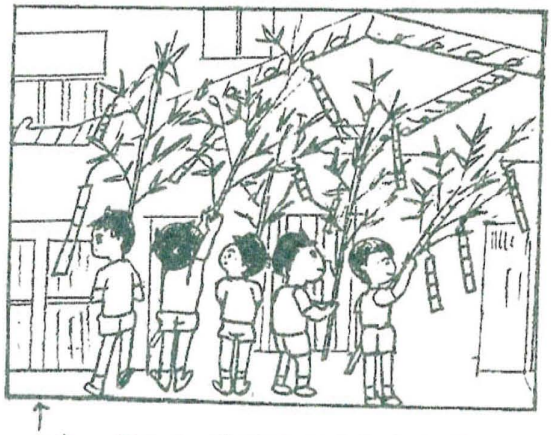
らしく生きる」ことを誓う行事である。霊は心の清らかな子どもに宿るとされており、霊が帰る時、この世の災害や病気などを払ってくれるという悪魔払いの意味もあります。

―どんなふうにやるの？―

うら盆24日の早朝または昼間に、対象年令の男の子たちが、太鼓や鐘をならしながら各家をまわり、施餓鬼旗をつけた新竹で軒先を払います。その時、おひねりが手渡されます。リーダーを中心に、太鼓や鐘をたたく子、笹竹で軒先を払う子、おひねりをもらう子、とそれぞれに役割分担ができています。

地区をひとまわりした後、各家からもらったおひねりは、子ども達のルールで分配されます。

夕方、初盆の家の燈籠や軒先を払った笹竹を川に流したり、焼いたりして精霊送りは終わります。（※以下、地区別の説明は略しますが、カットのみ転載しました）



↑各家の軒先を笹竹で払う子どもたち

8、回覧

（高御所三地区）

平成23年7月吉日

高三地区の皆様へ

曽我小H23年度高三地区役員

（氏名略）

チャンチャカチャン（精霊送り）のご案内

いつも子どもたちをあたたかい目で見守りいただきありがとうございます。

おかげさまで子どもたちは元気よく学校生活をおくっています。また、リサイクル等ＰＴＡ活動へのご協力も本当にありがとうございます。

さて、本年も高三地区の小学生が標記の行事で地区内をまわらせていただきます。

つきましては、地区内でも転居されてきた方が多くなりご存知ないお宅もあるかと思いますので、下記の通りご案内をさせていただくことにしました。（高二地区文書参考）

今年は小４～６年の男女８人で行う予定です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

記

Qいつやるの？

A裏盆にあたる７月24日　午後４時頃より行われています。

Qチャンチャカチャンとは？

A精霊送りのこと。鐘をチャンチャカチャンと鳴らすところから呼ばれるようになりました。（高三では鐘は使用しておりません。）

Q精霊送りとは？

A先祖の霊をお迎えしてお盆の供養を終え来年のお盆までと、別れを惜しみながら極楽浄土へと旅立たれる御精霊様の見送りをし、祖先への霊に感謝して自分自身が人間らしく生き

ることを誓う行事。そして霊が帰るときにこの世の災害や病気等を払ってくれるという悪魔払いの意味もあります。

Q なぜ子どもがやるの？

A 霊は心の清らかな子どもに宿るとされています。（昔から小４～６年生の男の子と決められていますが、現在は小子化で年によって参加者は変わってきています。）

Q やり方は？

A 笹竹を持って地区内全戸をまわります。
施餓鬼旗（たんざく）があるお宅は笹竹につけていただきます。
軒先を笹竹ではらいます。

笹竹は今年も12組の（氏名略）様にご協力をいただきます。ありがとうございます。

以上

９、岡津子供連の傘んぼこ

（鈴木昭二、平成20年ころ）

昭和14年８月24日盂蘭盆まで

８月13、14、15、16日、子供連で親和賛、妻和賛、子和賛、寺和賛、御十七のお念仏を初盆の家、以外（の）各家庭（は）お十七のお念仏を盆行事、８月16日の夜はおぜんこう様（善光寺様）で寺和讃を申し上げた。境内には板店が出た。今は見られないがガス灯を照した店であった。夏涼山仲道寺本堂前、善光寺如来へも寺和讃をチャンカラ（鉦）を打って申し上げた。真夏の寺は夏涼山仲道寺の去り行くお盆の行事の一夜であった。

８月24日は盂蘭盆行事のチャンチャカチャンであった。

子供連は朝４時頃から新竹に施餓鬼旗を付けて、家内安全、無病息災の願いをこめた厄払いの行事であった。午後２時頃より家庭の軒に出してある施餓鬼旗を集めた。夕食を済ませて、白鉢巻、白装束で太鼓を叩いて岡津子供連の提灯を先頭が高く上げて、大きな声で善光寺橋まで「よいとこさっさ」と元気よく、傘に釣した赤い布が舞い、村の人たちが精霊流にて送った。各（家）庭は門先で松明を炊いて送り出した。善光寺橋の上で百匁蝋燭を恍した時田の明りでお十七のお念仏を申し唱え精霊様を送り出した。長く続いたお盆行事は善光寺橋から精霊様となって消えてしまった。

子供達は夏休になると公会堂で高等科２年生の人が夏休の宿題等を教えてくれた。男の子は夏の盆行事を楽しみに待っていた。お布施をもらってお小遣が出来た。今のお祭の屋台を引き廻すようなものです。今想い出すと目に浮かんで、あの光景が懐かしい。

（鈴木勲氏蔵、（　）内は編者の補足）

10、よいとこさっさあ

（文化のしおり大１集『掛川のむかし話』
掛川市教育委員会社会教育課）

「カンカカカン、ドンドコドン」

お盆の十七日、子供らが打ちならす鐘や太鼓をミヨちゃは、ばーばの膝ん中でだんまって聞いていた。その鐘や太鼓の音は、ミヨちゃの耳に近づいてそのうちにだんだん遠のいて行っちゃった。「ねえ、ばーば、あれなんのおと?」、ミヨちゃは、ばーばの顔を下の方からのぞいて聞いた。「あの鐘や太鼓かえ。」ばーばは、ミヨちゃの頭をなぜなぜぽつりぽつりとおはなしをしてくれた。

むかーし、むかーしその昔、この水垂の上組の里に厄病神がおってな、ほうぼうの家に厄病をまきちらし、みんなこまりはてておった。

ぼってもぼっても(追っても追っても)またやってきちゃあ厄病をまきちらしていたげいな。

或る時、この里を通りかかった一人の坊さんが里のしゅうからこの話を聞いて「拙僧が、おぬしらの苦しみをすくってしんぜよう。」と里の寺にこもり、おいのりをしたと……

三・七、二十一日目の朝、それはちょうど七月十七日じゃった。施餓鬼幡を体じゅうにはりつけた坊さんは、里の一軒一軒をはしりまわった。

厄病神は、その施餓鬼幡にすいつけられ坊さんといっしょに安養寺のかむこう消えちゃった。それからというもの、この水垂上組の里にゃあ「よいとこ、さっさあ」(よい所よい里)ちゅう厄払いのならわしが、おこってのう、お盆の十七日になると、男の子らん集まって新竹に施餓鬼幡をぶらさげて、一軒一軒のき先を払って厄払いをして行ってくれるだよう。

一ばん大きい子らん、口ん中で「ヨイトコサッサー　ヨイサッサー」って言いながら鐘や太鼓をたたくだに。

そうするとな、鐘や太鼓の音が「ヨイトコサッサー　ヨイサッサー」って言ってるように聞こえてくるだよ。

厄払いをする子どもらあ、ものを言っちゃあいかんで、だんまってやるだに。

軒先を払ったら、うしろをふり向いちゃあい

かんだげな。ふり向くとまた厄が、その家へのり移るでな。お精霊様に背負せておいた、おだちんをいただいて次から次へと厄払いをして歩くだに。全部の家の厄払いがおわると、細田の先の安養寺ざかいまで笹を持ってって安養寺の方へその笹をなげつけて逃げて帰るだよ。「お厄様、安養寺の方へ行ってくりょうな。」って言ってなあ。

子どもらが、うしろに手をまわし、おちょうだいをしていると、一番でっかい子がいただいたお精霊様のおだちんをわけてくれるだよ。おだちんを、家に持って帰るとまた厄がついてくるちゅうてすぐお店へとんでって使っちゃわにゃあいかんだげな。いつの頃だかのう？やっぱし、むかーしの頃ずらが、「よいとこ、さっさあ」をやめたことがあっただに。どうしたこんか、その夏、水垂上組の里に疫病がはやって、あっちの家でも、こっちの家でも、死人が出たげいな。「よいとこ、さっさあ」をやめたもんでこんだとみんなは恐がった。さっそく村のしゅうは里のお寺に集まって厄払いをしてもらったそうな。なんとか流行病はくいとめたが、そりゃあはあ、こわくて、こわくてたまらなんだそうだに。次の年から又、この「よいとこ、さっさあ」を忘れんように、やることにしただよ。それからっちゅうもん、この水垂上組の里にゃあ悪病が流行こともなくみんな、みんなしあわせに暮しているだよ。

ばーばの膝ん中で、ミヨちゃはこの、おはなしを聞いていたら、ねむくなっちゃった。

「カンカカカン　カンカカカン」

子どもらん打ちならす鐘や太鼓は、安養寺の方へ消えて行っちゃった。みんなん家のお厄様を持って行っちゃった。ばーばは眠っているミヨちゃの頭にほっぺたをすりつけて「今年も、これで無病息災だ。」とひとり言を言ったよ。

（粟本グループ）

11、　餓鬼送り

（『袋井市史』史料編　民俗・文化財・年表s60年）

子供たちがムラ内の各戸を回って施餓鬼旗を集めて、餓鬼送りを行う地域がある。

16日の午後、集めた旗をムラの寺に持ち寄って焼く（春岡）。

門念仏を唱えながら集めて、16日の夜村境にもっていっき、明かりを消して逃げ帰る。まごまごしているとオショウロさまに取付かれる（下山梨）。

夜念仏を唱えて集め、笹竹に結んで村外れの橋の上から投げ込んで納めた（堀越）。

16日の夜、ムラ内を回って、門口に出してある施餓鬼旗を子供が集め、川へ流した（木原）。

24日早朝、年上の子供が鉦を叩いてムラ中を回る。各戸では新しい竹に施餓鬼旗をつけて門口や庭先に置く。年少の子供がこれを集めてムラの寺に持ち寄り焼却する（北原川・名栗・不入斗）

12、　オンベコンベ

（『豊岡村百話』　平成8年）

大楽寺　「オンベコンベにヨイトコヨイトコ」と三回唱えて門を祓い施餓鬼旗とお布施を集めて回る。笹に付けた旗は暗くなって青年有志が大念仏の鉦を打ちながら須山・エゲン坂に送る。

万瀬　17日の早朝、松明に使った竹に御幣をつけ、この精霊様を村境のコトガミに行き山に向って「オー」と叫んで精霊様を送る。

3．山の神関係

13、送り神

（『古老の知恵伝承誌』　昭和54年
財団法人静岡県老人クラブ連合会）

山の神をまつる童行事

川久保老人クラブ　故赤堀達平

毎年十二月八日の午後「ヤアマノ、カアミノ、カアアンジ」と口々に連呼しつつ、小さな幣をつけた身丈にあまる青笹を手毎に持って行く一団がある。後にはまだ歩けない幼児をおんぶした老婆たちが、これもまた短い青笹を持ってぞろぞろと続いて行く。

これは当川久保の天王ケ谷にまつられてある「山の神」の祭りを行うために子どもたちが村中を勧進して歩くのである。

十三才になる男の児が二人袋をもって先頭に家毎の軒先に訪れる。一団の子どもたちは「ヤアマノカアミ」を唱えながら青笹で軒を祓い悪魔退散を願う。その家ではかねて用意してあるお金、お米などを報謝する。

十四才になる男子二人で三事鐘を荷い「チャン、チャン、チャンーレンーボンレンーチャン」と七つずつ叩きながら一同を誘導する。このようにして村中を廻り終ると、一同は天王ケ谷の家に集る。年長の子どもたちは集ったお米は売ってお金に替え、出来たお金で先ず山の神に供

える豆腐一丁、天王ケ谷の家（今は管理者が区長に代わった）へ一丁、鐘を叩いた十四才になる児たちが一丁ずつ、十三才になる子どもは半丁ずつ、残ったお金全部でお菓子を買う。

青笹とお豆腐を持って山の神様に詣で、青笹は社に納めお豆腐は神殿に供えるのであるが、神殿といっても年々新藁で作った形ばかりのものに、やはり藁でつくったお椀に豆腐を三箸ほど供え子供たちの無病息災を祈る。

やがて山の神様からお供様の残りを持って帰ると待っていた一同の子どもたちは行儀よく一列に並ぶ。その一人一人に行きわたる様に配って廻る。続いて先に買っておいた菓子も一つずつ何回でも平等に配ってまわる。時には大きな袋に一杯になるほどもらう時もあるので、子どもたち待望の年中行事の最たるものである。

こうした行事もその起源は審かではないが、元治元年生まれの故老の言では「今年鐘を叩いた十四才の子どもも明くれば十五才で、昔は成人元服の年である。十五日に前髪を落として同じ十九日御縁日の同地本勝寺境内に勧請してある七面大明神のお燈明銭を集めながら成人を披露して歩いたものだった」と言うから、徳川時代既に行われておったものと推察せられる。
また、凶作のためこの神事が休まざるを得なくなった年には子供の疫病が大層流行して村中大騒ぎとなり、これは山の神の祟りであろうと恐れおののき、翌年からまた続けられたと伝え聞いている。

山の神　祠・供物の豆腐・笹竹

（平成23年12月）

勿論、この行事にも時の流れに従い幾変遷があった。特に太平洋戦争酣の物資極度に欠乏の如きは肝心の豆腐が買えない。やむを得ず家々から大豆を集めて豆腐屋に依頼して作り、無論菓子など思いもよらぬ時であったから残りの大豆を炒ってそれを分けあってすましたこともあった。そうしてまでも彼等は伝統の行事として継続してきたのである。

然し、今は違う。戦後の虚脱状態から信仰より享楽に移り、教育の要求が勉強時間の増長を強いられるなどの関係からか十四才を限度とした年令が小学校六年生となったようだし、十二月八日という祭日もその近くの日曜日にと、また奉加も前もって割付といった風習を生じたり、その額も年々大きくなった感がないでもない。

それはさておき、部落の素朴な信仰行事が歪められることなく継続され、ひいては部落民融和の源泉となり、また子どもたちは勧進ということを通して自分たちの努力の結果が自已満足を得るという道理を感得することができれば幸いである。

（これは静岡県教育委員会による昭和52・3年『静岡県民俗分布調査』の報告とほぼ同じもの）

14、岡山の山の神祭り

（『岡山の山の神祭りビデオガイドブック』岡山の山の神保存会　2007年）

深夜の集合

12月８日午前０時、子どもたちは山の神近くの辻に集まりました。ここで、神事に使う神饌の準備をし、６年生のオヤを先頭に５年生以下１年生まで順に並んで山の神の参道を登ります。

山の神の神事

神事の責任者はオヤです。まず、山の神に神饌をあげます。煮豆や豆腐などの神饌を供え終えると、オヤの「今から参拝します」の掛け声で一斉に柏手を打ち、型通りのお参りをします。参拝がすむと直会です。オヤから順に、やっこ豆腐・煮豆・お神酒を最後の１年生まで送ります。最後にもう一度参拝し、いよいよ勧進の出発です。

勧進に歩く

勧進は地区の上の方から下の方へ向かって行います。

今年の最初の家は、新生児がいる家です。「山の神の勧進やい。米なら１升、銭なら50銭」と大きな声を掛けながら玄関口に立つと、男の赤ちゃんを抱いたお母さんが出てきて、「この子をよろしくね」と、勧進の子どもたちに祝儀が手渡されます。すると、皆は手に持っている竹を振って答えます。これはお礼の意味です。ついで、将来の仲間になってもらうために。「大きくなったら山の神の仲間になってください」と、オヤからも祝儀が渡されます。

次の家でも玄関口に立つと「山の神の勧進やい。米なら１升、銭なら50銭」と大きな声を掛けます。家の人が出てきて「ごくろうさん」と、

用意しておいたお金やお米を手渡してくれます。お金は500円以上、お米は１升です。

こうして、次から次へと順次地区をまわります。お米がどんどん集まり、乳母車が重くなります。そこで、地区の真ん中くらいまで来ると一旦公会堂に戻り、休憩をします。お母さんたちがジュースの用意をしておいてくれました。集まった米をおろして15分ほど休むと、竹をもってまた出発です。竹はジャンケンで勝った者から順に交代で持ちます。交代する場所は適当に決めます。また、乳母車を引く人に特に決まりはなく、希望者が引きます。この役は人気があって希望者が集まります。が、どんどん重くなるため小さい子には無理です。昔はリヤカーが使われましたが、道路が舗装された上、乳母車は小回りが利いて扱いやすいので、乳母車に変えました。

深夜の０時から始めますが、年ねん家数が多くなり、終了の時刻は遅くなってきました。南の方の家に行くと、大きな声で「山の神の勧進やい。米なら１升、銭なら50銭」と、叫んでもなかなか起きてくれません。毎年起きてくれない家もありますが、迷惑でも必ず声を掛けます。声を掛けないのはハブセにしたことになるからです。

中には、袋にお金を入れてドアノブに掛けておいてくれる家もあります。こんな時には、起こさないように小さな声で声を掛けます。

勧進の取りまとめ

終ると、全員一旦公会堂へ戻ります。オヤが用意したカップ麺を食べて冷えた体を温め、すいたお腹を落ち着かせます。その後オヤは使った竹を山の神の登り口まで納めに行きます。

ひと休みすると、いよいよ勧進で集まったお金や米の計算が始まります。お米は父兄に買い取ってもらいます。今年は１kg400円で買ってもらい、換金した米は8,000円になりました。お金は32,000円、これに祝儀をたすと総額が出ます。総額から神饌の代金など経費を引いて、伝統的な分配率に基づき全員に分配します。１年生から順次もらい、もらうと一目散に家へ帰ります。眠気が最高潮なのです。

こうして、ようやく徹夜の祭りが終りました。数時間後には登校しなければなりません。

４．コト八日（コト神送り）関係

15、事神送り

（佐野一丸　北遠（磐田郡龍山村）風俗史（二）『土のいろ』第一巻第六号　大正13年12月）

毎年二月八日・十二月八日に行ひしものにて、二月に行ふものを事納めと称し、一年中の事業成功を祈ると共に、作物の虫送り・疫病神を送るの意なり。この日、各戸にては小さき団子をつくり串にさし、戸口等に立つ。而して毎戸一人ずつ神官の家に集り（神官なき所は一定の家）、幣を持ち鐘・太鼓を打ちつつ、一方にて、「何神を送るぞ」と唱へ、一方にて、「御事神を送るぞ」と唱和し、一定の所まで道中を送り行き、幣を納めて解散す（現今は行はれず）

16、八日神

（飯尾哲爾　はりはら雑筆　『土のいろ』第一巻第六号　大正13年12月）

浜松市の南、可美村・新津村地方に行はれる神送りの名称。七月八日の未明に、子供等は隊を組んで鐘をカンカン打ちながら、竹に紙幣をつけたものを捧げて「八日神を送れやーい」と呼ばって家々の門を訪れる。家では一、二銭を与へる。子供等は各戸を訪れて、最後に川端へ行って盛んに鐘をうって紙幣を流す。これで八日の悪神を流し去るといふのである。送神の習俗は各地にある筈。ご報告を乞ふ。

17、師走八日

（竹折直吉『日本の民俗静岡』昭和47年　第一法規出版）

榛原郡では十二月八日を、山の講と称してこの日山にはいることを禁じている。磐田郡佐久間町では、十二月八日から二十八日までの間に、吉日を選び山へ正月の飾り物を取りに行く。旧安倍郡清沢村（現静岡市）黒俣では八日神さま（歳神さま）にあわ餅を一二個（閏年には一三個）捧げる。

浜名郡新居町の大倉戸では、十二月を師走八日、二月を二月八日と称し、この日の朝早く八日餅をつき、オコトサマ（神棚）に一二個（閏年には一三個）供える。他村へ嫁いでいる者にも八日をしらせる意味で餅を配る。このあと山へ笹竹をとりに行き、それに四垂れのオンビ(御幣）をつけてすべてのへやを祓う。それがすむと笹竹は、ちょうど七夕の竹でも立てるように家の庭に立てる。夕方になると、厄病神を送るといって、子どもたちは村のサンジー（村小使い、現在はこの制度がないので副区長）がつく

ったバントブネ（船）を村社から引きずり出し、村中引きまわしながら各戸の笹竹でたたいて歩く。バントブネは椿の大枝にワラボウズ（わら人形）をのせたものである。

最後に村境にはってあるシメキリ（しめ縄）の外へ、すべてをほうり出す。そうしてサンジーから供物（痰切飴）などをもらってにこにこと解散する。昔は各戸の軒なども祓って歩いた。

18、御幣（おんべ）　西島町

（6年石川大輔外『浜松市南区こどもふるさと絵話』　平成23年）

御幣（おんべ）とは、十二月三十一日午前三時ごろに家をおはらいするための行事です。西島町で四・五・六年生の男子によって行なわれています。御幣（おんべ）の前の日には神社に行って体を清めます。まず神主さんが神様の前で鈴と榊の枝を持っておはらいを始め、神様をまつって無事終わるようにいのります。その後四・五・六年生の男子がおはらいをやり清めふだをもらいます。おんべを行う時には持ち物係を決めます。持ち物は地図、ライト、笹、清めふだ、袋です。

おはらいをする家についたら大きな声で「おんべやいと　ささやいと」と言います。そして笹を家にバサッバサッと強くたたくくらいにあててやくを払います。家の人がでてきたら、おひねり（お金のこと）をもらい清めふだをわたして「ありがとうございます。」と言います。五十けん以上の家を回ってこのようなことを行ないます。

昔はおんべが終わったら笹を川に流してうしろをふりむかずに急いで帰っていたそうです。おはらいした笹についた魔がふりむいた人についてきてしまうからです。これは今は行われていません。笹を古いお札と一緒に正月明けにもやします。清めふだは初もうでの日におさい銭といっしょにおさい銭箱に入れてお参りするのに使われます。

19、見付次第（山中恭古　明治42年）

袋井在の今井といふ地にては、師走の八日頃に、子供打連れ笹の葉へ紙を附けたるを持て村内戸毎に、

コーメヤ　コーメヤ　米ナラ一升　金ナラ百ダ

と呼りつゝあるき廻ることありといふ。

20、子供鐘太鼓井戦争（『すなぶくろ』）

毎年極月八日、二月八日は鐘太鼓というて男児勇立、六七才より拾四才迄を組として、相互青笹をきり、ぬさをつけ、毎戸の門に立ち、やいとうと大声をあける。鐘たたきは其声につれてチャンチャンチャコチヤントたたく。太鼓ハでんでこでん、此拍子で回るので随分賑やかであった。

（磐田市海老島の古田新五郎が昭和3年ころにまとめた思い出話集。必ずしも正確ではないこと、創作的なこともある記録のようであるが、天竜川下流域に行なわれていた可能性があるため収録する）

21、送り神

（豊浜小学校『校務日誌』）

明治十三年一月二十日条

霜月ノ八日ヲ以テ児童群集シ竹竿上ニ七五三ヲ貼付シ、鐘・太鼓ヲ鳴ラシ大声ヲ発シ、毎戸ニ入リ金銭・米穀ヲ貰ヒ、之ヲ称シテ悪疫ヲ除クト云ヒ、家々皆甘シテ乞食ノ体ヲ傚シテ貴重ナル光陰ヲ空消セシム

（『静岡県史』資料編25民俗三366pより転載）

22、送り神（十二月八日）

（『下岬の民俗―榛原郡御前崎町―』　静岡県史民俗調査報告書代十三集　平成2年）

大正中頃まで、子どもたちが送り神という行事をした。子どもたちはこの日のために前もって、この行事に用いるシュモク(鉦をたたく曲った木の根)やシャキシャキ(太い竹の先を割ったもので振るとこういう音がする）や太鼓を吊す棒を用意した。シュモクは椿の根で作ったので、当時椿油を採っていた関係上、子ども達が椿の根を切ることを喜ばなかったという。この他にも大きな御幣を用意するのだが、これは駒形神社の神主さんに作ってもらった。当日の夕方になると、子どもたちは親方と呼ばれる最年長者の家に行き、午前零時までは寝る。これは、午前零時を過ぎなければ送り神をしてはいけないからであった。この時刻を過ぎると、子どもたちは年長者の順に御幣（一人）、太鼓（二人）、鉦（一人）を持って行列を作り、その後には何も持たない子ども達が続く。ただし、最年長の二人は、袋持ちといって首に袋を吊り下げ、シャキシャキを持って行列の最後尾へと並ぶ。そ

うして、各戸を回り、庭に人って「送り神カンカンジー、何神送る、貧乏神送る、エートエート」と唱え、それぞれの採り物を鳴らす。そして、シャキシャキを戸口で鳴らして家の者を呼び、袋の中にお金を入れてもらって次の家へ移っていくのであった。

そして、最後は上岬との境にあたるホーギ下と呼ばれる浜まで貧乏神を送ったのであった。

このようにして貰った金は、子どもたちに分配されるわけだが、結局そうしたことが学校で問題になって禁止されることになったという。

23、送り神

（大沢六之丞『郷土のかおり　年中行事と習俗』　御前崎町役場　昭和45年）

〔送り神〕－年に二度　子供の行事として郷愁を誘う思い出－

陰暦（旧）師走（十二月）八日と、二月（きさらぎ）八日は年に二回の子供の行事「送り神」の日でありました。この送り神に参加できる年令は八～九歳からで十三歳が年長者でありました。年長者は「袋持ち」または「親方」といわれて、一行の統卒者であり会計役でもあって、頭目格でありました。一行は各部落単位で三～四十名から手数の多い部落では四～五十名にも及び、参加のできることは、健康であり奉仕であることの誇りをもっていました。

【準備・予行】

まず少年たちは前日（十二月、二月）の七日に学校からかえるとただちに集まり、鐘や太鼓をととのえ、御幣をきって爆竹をこしらえて、リハーサルを、そして翌朝といっても、夜中がすぎると鐘と太鼓を合図にとびおきて、馳せ参じたものでした。中には遅刻をおそれて友人や親方など年長者の家に合宿した周到組もありました。

【呪文】

こどもは寒風をついて高らかに鐘と太鼓の調子にあわせる呪文は、"送り神をおくる、何神を送る、貧乏神を送る、疫病神を送る、ソーレー"パチパチ（爆竹の音）

こどもながらも一団数十名が悲壮な叫びをあげ戸毎に、おうど（前庭）を足早に一巡して次ぎ次ぎと声をからして行ったものです。しかしこうした難関を年二回ずつ数年間突破しないと、袋持という親方にはなれなかったし、皆勤者のみに与えられる袋持ちの権力を得ることは、生やさしいものではなかったのです。

明治三十四年のことでした。初回の私のわけまい（分配）は"七厘"でした。母にみせたら瞼がうるんでいた。母はいたいたしく思ったのか、それとも人並に成長したわが子がうれしかったのか？…今でも生々しい情感がわいてまいります。ついでに今少し私の体験を書きつづけましょう。

【巡路】

部落内の西からはじめて東で終るのが部落の風習で区によってはこの反対の場合もあった。鐘と太鼓で調子を揃えて打ち鳴らし、呪文を張り上げ、爆竹を鳴らして戸毎をまわる。袋持ちが銭をもらうと合図して次から次へと巡路を進行して夜明けごろには部落内もれなく一巡して終る。もっとも二か所、鐘を仰向けて米をもらったうえ休憩させてくれる有力者があったことを覚えています。

【用具】

鐘（俗にサンジガネ）、太鼓、この後につづく爆竹、これは太目の竹を一.五㍍位に丸切りして、それを三分の二ほどわりさき、わらぬ残り三分の一の部分を下腹（股の上）にあてて、上下に威勢よく振ると、これが三～四十名の集団ですから、寒風を吹っとばすように音をたて勇壮なものでした。御幣も忘れられぬ用具でした。

【服装】

少年達は綿入れを丸くなるように重ねて、頭にチヨンガリ（防空ずきん）、自家製の刺子の手袋、フランネルのえりまきで顔を包み目だけだし、藁草履は紐つき、これが"送り神少年のいでたち"でした。旧暦の師走と二月、少年達の寒風膚をつんざく夜半をつく身ごしらえです。

【厄払い（やくばらい）】

年長者は二㍍位の竹竿に御幣をつけて先にたち「貧乏神どうけどけ」「厄病神どうけどけ」と喝えて、軒下、家の中、求めによっては病床まで払ってまわる。厄払いの重要な役目でした。払われる側もたしかにありがたがったものです。

【納め】

こうして部落内をまわり終ると東の空がしらじらとするのでした。一団は所定の「会所」にひきあげ、用具をまとめて納めに行きます。帰りにあとをふりむくと「払った悪魔がついてくる」といって、絶対ふりむくなときつくいましめられていたものでした。

【分配】

そうしているうちに、袋持ち（親方）は大袋にたまっている銭をぶちまけて、みんなの面前で一人一人に年代順や、参加度数によって「わ

けまい」を手渡したものです。増配率は回数毎に五割位と記憶しています。もっとも袋持ちは同年者の数で按分したが要領のよい袋持ちは、すでにヘソクッテいた、これをクスネルといったものです。またクスネルことを「てらのやね」だともいい、それはお寺の屋根は〃コーバイが早い〃という意味で、まるでクイズのようですが本当です。要領よくクスネル者をりこうだとほめた反面、寺の屋根がばれて、大さわぎの場面もあったが、何にしても、強い者が勝った時代でした。けだし分配のいらざる内幕です。

明治三十九年のことです。私も同輩三名で袋持ちでしたが、いかんながらレベルは平屋根程度で苦笑したものでした。

この送り神の行事は明治四十二年師走八日をもってピリオドが打たれております。これも私の体験です。

【起源】

この子供に負わされた「送り神」という行事は、いつごろからはじまったか、その起源は明らかでない。古老の口説では天明のころ（約百八十年前）と伝えられ（天明年代は、やく病で死者三十万と記されている）、また維新の"おかげ年"にはじまるとも口承されているが、考証にあたいするものはないようです。

この行事も、明治末期になると時代の進展に伴い、学校教育の徹底によって教則上、学童に袋をもたせて銭もらいは、教育に反するという抗議がでて、逐年衰退しつつ遂に解消してしまいました。

隣町新庄では昭和二十九年ごろまで鐘や太鼓がきこえたが、おそらくこれが近在のラストであったでしょう。

申しおくれましたが、この日の夕方には農家では、お八日（おようか）といって牡丹餅をつくり、家令によっては揚き餅を神仏に供えて祭礼を行なったものです。戦前までは「お八日」の名残りをとどめていました。

ところで明治育ちの腕白盛りの悪童どもには送り神につきものの喧嘩がありました。石や岩を投げあっての実力戦でした。今や恩讐をこえての苦笑もので、当時の友とひそかに話し合っては頭をかいているものです。野蛮的な古疵（傷）はさしさわりもありますので省略いたします。

24、大渕小学校における農繁休暇一覧表(右頁)

大渕小学校経営書より作成

６月の田植休だけでなく５月の麦刈休、11月の稲刈休、11月の麦播休、12月の芋掘休も参考のためにいれておく。高度成長期に農業より工業への変化した様子を見ることができる。

25、盆の時期一覧表

	７月	８月
旧掛川市	日坂地区（古宮・下町・本町） 東山口地区 西山口地区（薗ヶ谷・宮脇・葛川ほか） 掛川第一地区（仁藤町・肴町ほか） 掛川第二地区（栄町・紺屋町ほか） 掛川第三地区（中央・下俣町・十九首ほか） 掛川第四地区（城西） 掛川第五地区（大池・上屋敷ほか） 南郷地区（杉谷・上張ほか） 西南郷地区（久保・亀の甲ほか） 上内田地区 倉真地区 粟本地区（水垂・初馬ほか） 城北地区（下西郷・城北町ほか） 西郷地区（五明ほか） 曽我地区（高御所）	東山地区 日坂地区（古宮・下町・本町を除く） 桜木地区（上垂木・下垂木ほか） 原谷地区（本郷・西山ほか） 原田地区（寺島・上西之谷ほか） 原泉地区（居尻・萩間ほか） 曽我地区（高御所を除く） 和田岡地区（吉岡・高田ほか）
旧大東町	千浜地区 大坂地区（大坂・三井ほか） 睦浜地区（浜野・三俣ほか） 土方地区（入山瀬・上土方ほか） 佐東地区（高瀬・中方ほか） 中地区（中・川久保ほか）	
旧大須賀町	横須賀第一地区（横須賀13町） 横須賀第二地区（横須賀13町）	大渕地区（藤塚・雨垂ほか） 横須賀第一地区（横須賀13町を除く） 横須賀第二地区（横須賀13町を除く） 横須賀第三地区（沖之須・今沢ほか）
他		旧小笠町

※時代の変化で、各家の希望により７月や８月に実施している場合もある。

24、大渕小学校における農繁休暇一覧表

	麦刈休(５月)	田植休(６月)	稲刈休(11月)	麦播休(11月)	芋掘休(11月)	農休日数
S29	3	5	3	2	2	15
S30	3	5	3	2	2	15
S31	3	5	3	2	2	15
S32	2	5	3	2	2	14
S33	2(下旬)	5(中旬)	3(上旬)	2(中・下旬)	2(上旬)	14
S34	2(下)	4(下)	2(上)	1(中)	1(上)	10
S35	2(下)	4(中)	2(上)	1(下)	1(11月中)	10
S36	2(下)	4(中)	2(上)	1(下)	1(11月中)	10
S37	2(下)	4(中)	2(上)	1(下)	1(11月中)	10
S38	3	3	2(10月)	稲刈休２		
S39	2	4	4			10
S40	茶休２	3	3			10
S41	2	3	3			8
S42	2	3	2			8
S43		2	2			7
S44		2	2			4
S45		2	2			4
S46		1	1			4
S47		1	1			2
S48		1	1			2
S49		1	1			2
S50		1	1			2
S51		1	1			2

S52以降、農休日と思われる記載はない。

参考文献

・『掛川市史』上巻　平成９年
・『静岡県史』資料編民俗２－195・758・929p
・『静岡県史』資料編民俗３－15・195・361・652・669・862p
・『静岡県史』別編２自然災害誌　711p
・『静岡県史民俗調査報告書』８杉の民俗平成１年・９草木の民俗平成１年・13下岬の民俗平成２年
・『静岡県民俗地図』昭和53年
・『静岡県の祭り・行事－静岡県祭り・行事調査事業報告書－』静岡県教育委員会 平成12年
・『新居のこと八日』新居町教育委員会　昭和60年
・『水窪町の念仏踊』水窪町教育委員会　1997年
・『豊岡村史』考古・民俗編　1993年
・『浅羽町史』民俗編　1998年
・中道朔爾『遠江積志村民俗誌』（日本民俗誌大系第五巻）角川書店　1974年
・富山昭『静岡県の年中行事』静岡新聞社　昭和56年
・富山昭『静岡県民俗歳時記』静岡新聞社　平成４年
・吉川裕子『静岡県子ども民俗誌　ハレの日の名優』静岡新聞社　平成11年
・静岡県民俗学会編『静岡県の祭ごよみ』静岡新聞社　平成２年
・『岡山の山の神祭りビデオガイドブック』岡山の山の神保存会　2007年
・『送り神―野田平・足久保―』静岡市教育委員会　平成12年
・『マメタクと水神祭り―玉川の祇園行事―』　静岡市教育委員会　平成14年

子どもたちによる「送り神」行事
ー静岡県掛川市ー
2012年３月30日発行

発　行　掛川市無形民俗記録作成事業実行委員会
事務局　掛川市教育委員会社会教育課
静岡県掛川市長谷一丁目１番地の１
TEL 0537-21-1158

印　刷　株式会社アプライズ磐田営業所
静岡県磐田市下万能678
TEL 0538-36-0321